



プロローグ

街灯のかすかな明かりだけが差し込んでくる部屋の中。

和臣の身体が浮かび上がる。きれいに筋肉のついた、たくましい身体。

高校生になってからもどんどん身長が伸びて、ぐんと引き締まった印象になった。

その和臣と朝矢は今、身体の中心で繋がっている。

「何ぼーっとしてんの」

「ああ...っ」

ぐっと奥まで突かれて、背筋をぞくりと快感が駆け昇った。

和臣はゆっくり顔を近付けて来て、息がかかりそうな距離で囁いてくる。

「俺としてる最中に考え事？」

「違...、オミのこと、見てて...っ...」

わざと腰を引いて、抜けそうな所でゆるく遊ばせるように焦らしてくるのがたまらない。

頬にちゅっとされて、そんな小さな事でも刺激として受け取ってしまう自分の身体がうらめしかった。

「俺のカラダ見てたの？で...どう？」

「どうって...あ...あ.....」

繋がった部分に意識が集中して、和臣の言おうとしている事がすぐには理解できなかった。

「欲情した？ってこと」

「あうっ.....」

くちゅ、と音がして、ずっと蜜を零し続けている朝矢自身を握り混まれた。

和臣は指の腹で先端をぬるぬると撫で回して、朝矢を追い詰める。

「ねえ、欲情した？」

「っバカ...、あっ.....や...んう...」

付き合い始めて1年。

こうして関係を持つようになって、和臣の新たな一面が見えた。

普段は学生らしくしているのに、セックスの時だけ妙にいやらしい事を言ったりする。

トモが恥ずかしがるのが可愛いんだよ、なんて言われたって...

「ねえってば」

挿入している所を指でなぞられ、そこがきゅうっと締まるのが自分で分かった。

早く動いて欲しくて、この疼きをどうにかして欲しくて、無意識に腰を浮かせてしまう。

「あ...じゃなきゃ、こんな事.....しな...っ.....」

あまりに恥ずかしくて、ぎゅっと閉じた瞼が熱くなった。

そこに和臣の唇がやわらかく触れてきて。

「嬉しいよ」

次の瞬間、和臣は激しく腰を打ち付けてきた。

「あああっ.....ああ.....あ.....」

熱いモノが中を擦る度に、頭が真っ白になりそうな感覚に襲われる。

さんざん焦らされて溶けそうになっていたそこは、和臣を離すまいと絡み付いた。

「トモン中、すごい気持ちい...」

感じているのか、少し掠れた和臣の声に一層煽られる。

「あ…っ、あっ……ふ…あ…」

声を殺そうとすると、たっぷり使ったローションでぬめるそこから淫らに濡れた音が聞こえて、聴覚からも犯されている気分だった。

何をどうしてもひどく感じてしまって、自分をコントロールできずに昇り詰めて行く。

「あっあっ…あっ……オミっ……」

「何？」

「…っもう……」

「イキそう？」

必死に顔を限界を訴えると、和臣は朝矢の手を握ってくれた。

「いいよ、イッて」

「っあああ……っ……」

深く貫かれ、朝矢は薄れ行く意識の中で和臣に抱き締められるのを感じた。

第1章（1）

今日も一日よく晴れていた。

真っ赤な夕焼け空がまぶしい。

そのまぶしさをさえぎるように朝矢と空の間に入ってきた、もっとまぶしい笑顔。

「お待たせ。帰ろうぜ」

朝矢の大好きな、和臣の笑顔。

「あれ、残ってんのトモだけ？みんなは？」

「日が暮れる前に帰りたいってさ」

日直の仕事をサボろうとして先生につかまった和臣は、さっきまで職員室でしぼられていた。

朝矢はクラスメイト達とだべりながら和臣が戻ってくるのを待っていたのだが、あまり長いので皆は帰ってしまったって訳で。

「やっぱりトモだけだよなあ、最後まで待っててくれるのは」

和臣は顔の前でありがたそうに手を合わせる。

「そりゃあ...」

待ってないと一緒に帰れないじゃん？

1人だけ残ればオミを独占して帰れるし。

何の為に同じ高校受けたと思ってるんだよ。

心の中ではそう思ったけど、

「まあ、友達として当然だろ？」

手を腰に当ててふんぞり返ってみせる。

和臣はそんな朝矢に「へへー」なんて頭を下げたりして。

こういうバカみたいなやりとりだって、朝矢には楽しくてしょうがない。

「じゃ、お礼はラーメンおごりでいいからな」

「へっ？」

朝矢の一言に、和臣が目を丸くして顔を上げた。

「待ってたら腹減っちゃったよ。食って帰ろうぜ」

確かに、腹も減っている。

でもそれ以上に、このまま帰るのがもったいなかった。

和臣と少しでも長く一緒にいたくて。

「負けるよなあ、トモには」

「よし、決定！」

何で朝矢がこんなにテンションが高いのか、和臣はきっと知らない。

「やっぱここのラーメンうまいよなー。ごちそーさん！」

和臣と一緒に食べたから、腹だけでなく胸もいっぱいになったようだ。

とは、本人には言えないけれど。

「遅くなっちゃったけど大丈夫か？トモン家遠いのに」

「だーいじょぶだって。うちの親ちょっと過保護だから、たまには心配させた方がいいんだよ」

和臣は高校に近い方がいいからと実家を出て、学校から自転車で20分くらいの所にあるアパートで一人暮らしをしている。朝矢は千葉の実家から。家族は好きだけれど、あまり干渉されるのはちょっと煩わしい。思春期というのはそういうお年頃だ。だからある程度奔放が許されている和臣がうらやましかった。

でも、自分が一人暮らしをするとして、家事がつとまるとも思えない。料理なんかした事もないし、掃除も洗濯も面倒くさい。

そういえば、和臣はいつもどうしてるんだろう。一人で全部やっているんだろうか。できるものなのか？それとも誰か...

...

イヤな考えが頭を過ぎって、慌てて振り払った。

「ほらトモ。駅まで乗せてってやるよ」

和臣は自転車にまたがると後ろを指差した。

そうだよ。考え過ぎだ。

俺って単純、と思いながらも、にやける顔を隠すようにしっかりと和臣の背中にしがみついた。

第1章（2）

トモこと幸田朝矢（こうだともや）とオミこと木下和臣（きのしたかずおみ）の出会い、2年前にさかのぼる。

中2だった朝矢達は、それぞれが埼玉と千葉に住んでいたから当然中学は別だった。

それが何故知り合ったかという、簡単に言えばナンパだ。

...簡単に言い過ぎかも知れないけれど。

学校の行事で渋谷に来ていた朝矢は、帰りに友達と別れた後で人混みに飲まれた。

もともと小柄だし、その頃は渋谷なんて慣れていなくて前に進むのも大変で。

弾き出されて逃げるように入ったファーストフード店もとても混んでいて、とりあえずポテトとコーラなんかを買ってみたけれど席がない。

（何やってんだろ俺...）

「ここ、空いてるよ。相席だけど」

トレイを手に途方に暮れた朝矢に近くの前席から声をかけてきたのが和臣だった。

「え、あの」

「いいから座んなって。突っ立っていると他の人に邪魔だしさ」

向かい合った和臣はすごく大人っぽく見えて、最初は年上かと思った。

お礼がてら自己紹介をしたら同い年だと分かったものの、朝矢はどうしても畏縮してしまう。

自分より大きいだけじゃない、朝矢の友達にはいないタイプだったから少し戸惑っていたのかもしれない。

でも、カッコいい。

そう思った。

和臣は明るい性格で話も上手く、屈託のない笑顔でどんどん朝矢の緊張を解いてくれた。しばらく話すうちに、気がつけば朝矢達はすっかり打ち解けていたのだ。

「ね、また会えるかな？俺と友達になってよ」

最初にそう言ったのは朝矢の方からだった。

和臣は快く応じてくれて、「他校の友達欲しかったんだ」なんて言ってくれて。

聞いてみたらお互いの家が遠くてがっかりした。こういう渋谷みたいな所に出てくるのは苦手だし、どうしようか。なんて考えていると、和臣が身を乗り出して

「千葉に住んでるってさあ、もしかして海近い？」

と聞いて来た。

朝矢の住まいは最寄り駅の名前に「海岸」がついているくらいで、家から海まで自転車で行ける。

そう説明すると、和臣は自分が千葉まで遊びに行くと言い出した。

「ホラ、埼玉って海なし県じゃん？水に飢えてるんだよ」

そんな理由だったけれど。

じゃあ早速今度の日曜に、と約束をして、一緒に電車に乗った。

「あのさ、俺のこと木下君とか呼ばなくていいから。オミって呼んで」

「オミ？」

「カズオミだから。兄貴の和典がカズって呼ばれてるから、俺はオミ」

お兄さんいるんだ、と呟く。和臣のお兄さんなんていったら、一体どれだけいい男なのだろう？

「で、君のことは？何て呼ばれてんの」

「えっと...みんな名前朝矢って」

「じゃ、俺はトモって呼ぶ」

そう言われてなんだかどきっとした。他のみんなとは違う、「特別」な気がしたから。

実際和臣はそんなことまで考えていないだろう。それは分かっているのだけれど、朝矢は一人で赤面した。

「じゃあな、トモ。日曜に」

和臣は早速その呼び名を使って、乗換駅で降りて行った。

日曜になればまた和臣に会える。

その気持ちの正体が恋だったなんて、「新しい友達ができる」という喜びに支配されていた朝矢自身が、その時はまだ気付いていなかった。

その日の夜、朝矢は夕食の席で和臣の事を家族に話した。

うちはいわゆる家族団らんをきちんとしている家で、その日あった事なんかを話すのも普通の事で。

何より朝矢は新しい友達ができるという喜ばしいニュースを、早く誰かに話さずにはいられなかったのだ。

背が高く、大人っぽくて、カッコよくて、他の友達とは違ってて。

そんな人が朝矢の友達に加わったという事に家族も多少驚いてはいたけれど、こっちに遊びに来るなら連れてきたらと言ってくれた。

「そんなにカッコいいんなら、私の彼氏にしてもいいかもー。2コ下なら許容範囲だし」

姉のこの発言には、即座にダメだと言っておいた。

でも、考えてみれば和臣がモテない訳がない。まだ中2とはいえ彼女くらいいるのかもしれない。渋谷で遊んだりしてるんなら声をかけられることもありそうだし、和臣が朝矢に声をかけてきたみたいに女の子に声をかけている事だってあるかもしれない。

あまり考えたくなかった。

第1章（3）

日曜日。

朝矢は張り切って約束の30分前には駅に来ていた。

もし和臣が早く着いてしまって、待たせるような事になったら申し訳ない。それよりも早く和臣に会いたくてしょうがなかった。

昨晚和臣が待ち合わせの確認で電話をかけてきた時、当時は携帯を持っていなかったから家の電話にかかってきたのを母が取次いでくれたのだが、朝矢は礼もそこそこに子機を奪い取るように部屋にこもって話をした。

どきどきして眠れなかったけれど、何とか早起きして今に至る。

「そろそろかな...」

そわそわしながら、電車が着く度に改札から出て来る人たちの中に和臣の姿を探す。

待ち合わせの10分前、和臣を見つけた。

「オミ！ここ！」

和臣が気付くように飛び跳ねて手を振って。

「おー、ごめん待たせた？」

「ううん、全然。...あれ？何、それ」

見ると和臣は、小さなラジカセを持ってきていた。

「ああ、結構持ち歩いてるんだ」

「でもラジカセならうちにもあるよ。それじゃないとダメなの？」

「外で使うからさ、自分のじゃないと。俺ダンスやってるんだ」

「ダンス！？」

びっくりした。

聞けば和臣は体を動かすのが好きで、自己流ながら海外アーティストのビデオで研究したりしてダンスの練習をしているという。どこでもできるように、休日も出かける時はラジカセを持ち歩く事が多いのだそうだ。

「公園とかでやってると、見てて拍手してくれる人もいるんだよ」

「すごいね...」

感心してしまう。つくづく自分とは違う世界を見ているというか。

でも和臣はそんな朝矢に対して、もっとびっくりするような事を言い出した。

「すごいねじゃないって。今日からトモもやるんだよ」

「へっ！？」

何の為に持って来たと思ってんの、と和臣は笑った。

「トモ、見た感じ運動神経は良さそうだし。大丈夫だよ」

俺がちゃんと教えてあげるから。

そう言って笑顔を見せられると、朝矢はそれ以上NOと言えなかった。

ちょっとうちにも寄らせてみたら、和臣は家族からえらく評判がよかった。

「昨日の電話の時にも思ったのよー、礼儀正しいわよねえ」

母がデレデレしている。

「やだ、ホントにカッコいいじゃん！」

姉までしゃしゃり出て来た。

「オミ君てさ、彼女とかいないの？モテるでしょ」

その言葉にどきりとした。考えないようにしていた事なのに。

やっぱりいるんだろうか。でもいたとして、それが朝矢に何の関係があるかと言われるとよく分からない。

ぐるぐると思考を巡らせていると、和臣が明るい声で答えた。

「いないですよー。欲しいですけど」

「「えっ、ホントに？」」

姉と朝矢の反応が見事にかぶって、思わず顔を見合わせる。

和臣はそんな朝矢たちを見て吹き出した。

「そっくりだ」

やめてよー！と反論すると、苦笑する朝矢。

正直、ほっとしていた。

その日は和臣のダンスを軽く見せてもらって、朝矢は基本的なステップなんかを少し教わった。

和臣は自分で言った通り丁寧に教えてくれて、腕が触れたりする度に朝矢はどきどきした。

慣れないダンスを人通りのある所で練習する緊張もあったんだと思う。

それ以外の何か……あまり感じた事のないような感覚。

楽しい時間はあっという間に過ぎて、朝矢は和臣を駅まで送って行った。

改札を抜けた和臣に手を振ってホームに向かう後ろ姿を見送っていると、その後ろ姿がふいに振り返って。

「来週も来ていい？」

和臣は確かにそう言った。

朝矢は驚いたのと嬉しいので何も口に出せず、ただただ何度も頷いた。

それから何度会っても、あのどきどきする感覚はなくなる事はなかった。

親友と呼んで何ら問題ない程距離が近くなって、たまにはプロレス技をかけ合ったりするような遠慮のない仲になっ

ても、和臣と触れあう事に精神的な免疫ができないままで。

和臣に会えなくて寂しくて仕方がなかったテスト期間に、朝矢は自分の気持ちをこう解釈した。

きっと恋なんだ、と。

第2章（1）

相変わらずの片思いながら、和臣に恋して早2年。

幸いにもというべきか学力が同程度だった朝矢達は、現在同じ高校に通っている。

和臣に合わせて選んだ都内の高校。

受かった時も嬉しかったけれど、同じクラスだと分かった時は涙が出るほど嬉しかった。

しかも、一人暮らしを始めて自転車通学になった和臣は毎朝学校の最寄り駅で朝矢を拾って、特に用事がない限りは帰日も駅まで乗せて行ってくれるという大サービスで。

ゴールデンウィークが明ける頃には、朝矢達は学年でも有名なコンビになっていた。

雲行きが怪しくなって来たのは、朝矢達の周りに女の子が集まるようになってからだった。

正確には朝矢達、というより和臣目当てなんだと思う。和臣は入学当時からとても目立っていて、あちこちからあの子が和臣に惚れたらしいなんて話も聞こえ始めていた。

朝矢みたいなちんちくりんがいつもつるんでいる事で、和臣はかなりガードが緩いと思われたのだろう。実際和臣は人を変なことで判断したりせず、誰とでも仲良くなれるタイプだった。

そして今日も、弁当を食べ終わってしゃべっていた朝矢達の周りは騒がしい。

「木下君と幸田君てさ、全然違うタイプっぼいけどすごい仲いいんだねー」

「意外だよねー」

うるさい、女子ども。と朝矢は唇を尖らせた。

まるで朝矢が邪魔だと言われているみたいで、居心地が悪いっただけ。

「みんなトモの良さを分かってないんだよ。何でこいつが俺の親友なのか考えてみろって」

和臣本人がそうフォローしてくれるのが唯一の救いだ。

「木下君の方から声かけて知り合ったんだっけ？」

「そう、俺の見る目は確かだったってこと」

「やだー、それってナンパ？」

キャーっと黄色い声があがる。だからうるさいってば。

朝矢は愛想笑いを浮かべつつ、心の中で悪態をついた。

誰にでも優しい和臣がこの時ばかりはうらめしい。そこが大好きな所でもあるのに。

「俺、喉乾いたから自販行ってくるわ」

自分の心の汚い部分を見続けるのが嫌で、朝矢は席を立った。

休憩や勉強の為に開放されている多目的ホールで、朝矢は缶ジュースを飲みながら残りの昼休みを過ごす事にした。

もしかしたら和臣が追って来てくれるかも...と思ったけど、そうではないらしい。

（そりゃそうだ...あいつは俺の事、友達としてしか見てないんだから）

ちょっとでも期待した自分が情けなくて、余計に落ち込んだ。

「よお。相方が色男だと大変だな」

向かいに座ったのは同じクラスの奈良俊介だった。高校に入って早々仲良くなった友人だ。無条件にいいやつ、というところか。

「うらやましいなあ、毎日ハーレムで」

俊介はそう言って、テーブルに突っ伏すようにだれている朝矢の額を指でつつく。

「代わってやりてえよ。俺クラスの女子に興味ねーし……あ」

待てよ、と。俊介と代わったら、「いつも和臣と一緒に」いう朝矢の定位置が……。

「うわ、贅沢。じゃ代わってくれよ、マジで」

「ダメだ。やっぱり代わんね」

「何だとー。さては興味ないとか言って、誰か狙ってんな？」

「違げーよ、バカ」

バカバカしい会話で少し気分を晴らしていると、俊介の後ろから朝矢に声がかかった。

「幸田君、今ちょっといい？」

これまた同じクラスの佐藤香織だった。女子の中では背が高めで、割と美人な方だと思う。朝矢とは普段ほとんど接点がない彼女が何の用なのか、とっさに想像がついた。

「あ、俺外した方がいいよな？」

「ごめんね、奈良君」

俊介と入れ代わりに、彼女が朝矢の向かいに座った。

案の定、香織の話は和臣に関する事だった。

彼女はいつも群がってくる女子達に混じっている事はない。どちらかというとな大人しい感じだったから、印象は悪くなかった。それだけに、この子が和臣にそういう感情を抱いているという事は朝矢にとって心中穏やかではないのであって。

「幸田君、いつも一緒にいるでしょ…だから」

つまりは朝矢に和臣との仲を取り持ってくれと。

朝矢が和臣に惚れてるから他人の手伝いしてる場合じゃない。

とは言えず。

「うーん、俺からって言うより佐藤さんが直接動いた方がいいんじゃない？オミにはストレートな方がいいと思うし」

「そうなの？」

「あいつ、ああいう性格だし。それに俺が佐藤さんの相談受けたって知られない方が良くない？」

ゴメン、佐藤さん。俺から和臣に誰かと付き合っやってくれなんて言えないんだよ。言いたくない。俺だって自分の気持ちを伝えたいけど伝えられなくていっばいいっばいなんだ。

「佐藤さん結構かわいいから、いけるかもよ。頑張んなよ」

本当はそんな事望んでないくせに、俺のバカ。偽善者。

俺だって誰かに「頑張れ」って言って欲しいよ。

和臣から「佐藤さんに告白されて、付き合う事にした」と聞かされたのは、その数日後の事だった。

第2章（2）

その日は和臣と一緒に帰れなかった。

急ぎの用事があるからと嘘をついて、駅まで走って電車で飛び乗って。

家までの1時間ちょっとがとても長く感じて、早く一人になりたいくて辛くてしょうがなかった。

家族が心配していたけれど、帰ってからは夕飯も食べずに部屋にこもって泣いた。

泣いて、泣いて、こんなに泣いた事ないと思うくらい泣いて。

夜中になってから風呂に入ろうとして脱衣所の鏡を見たら、ひどい顔をしていた。

そんな顔をするな。オミが変に思うだろ。

そう自分に言い聞かせて頬を叩くと、また涙が出た。

次の日から、和臣は毎日自転車で駅と学校の間を送り迎えしてくれた。

「俺じゃなくて佐藤さんにしてやれよ」

ぼそりとそんな事を言ったら、女の子は危ないから乗せられないという。

トモが運動神経いいの知ってるから、後ろにのっけて無茶できるんだよと和臣は言う。

何だか余計に切なかった。

そのうち和臣と香織の仲が周囲にも公認になって、校内では和臣の隣に香織がいる事が多くなった。朝矢は居場所を失った気分だった。

そんな時、いつも和臣と朝矢の周りにいた女子のうちの一人が、朝矢に話し掛けて来た。

「幸田君、佐藤さんに木下君取られちゃったねえ」

「あー、あいつが楽しいんならいいんだよ」

生返事しかできなくてごめん。俺は傷心中なんだ。

「でも幸田君、最近つまんなそうだよ。何なら私と付き合わない？」

その女子...天野結は、にこにこしながらそう言った。

「あのな。そんな風に慰められても...」

「冗談じゃなくって。私は最初から、木下君より幸田君の方がいいなって思ってたんだから」

告白された。理解するのに時間がかかった。

朝矢はちらりと和臣に目をやった。香織と楽しそうに話している、和臣。朝矢の手にはもう届かないのだろう。

「じゃ、いいよ。俺おまえの事きらいじゃないし」

ひどく投げやりな気分で、朝矢は結ににっこり笑ってみせた。

和臣が見ていればいいなんて思いながら。

和臣に続いて朝矢にも彼女ができた事で、朝矢達は「凸凹カップル」と呼ばれるようになった。

背が高く大人っぽい和臣と香織、小柄で童顔な朝矢と結。

結は朝矢より背が低くて、中学生だと言えればまだ通るかもしれないあどけない顔をしている。可愛いと言えれば可愛い部類に入るだろう。

このまま結を好きになってしまえば、和臣への気持ちを忘れられるかもしれない。

朝矢は結といる時間をできるだけ増やすようにして、カップルらしく振る舞った。いつの間にか名前呼び合っている和臣たちに対抗して、朝矢もそうしてみたり。

でも、努力すればする程、虚しさが増長するような気がしてならなかった。

胸のなかにじくじくと広がるような苦い思いが、いつまでたっても消えなかった。

ひとつ良かった事といえば、香織と結が思った以上に仲良くなった事だ。和臣と朝矢と同じで一見タイプの違うように見える2人は、朝矢達を介して接する機会が多くなるうちにお互いを気に入ったらしい。

「カオリってちょっと近寄りたいたいかと思ってたけど、ほんとはすごく優しくていい子なんだよ。あの木下君が彼女に選んだのも分かるなあ」

結がそんな事を言っていた。

2人が近づいた理由には、朝矢に彼女ができてからも和臣が朝矢の送り迎えをやめなかった（ので残された2人がいつも一緒に帰るはめになった）事もあった。

「男同士、女同士の時間ってのも大事なんだぜ。恋をしてても友情を捨てちゃおしまいだからな」

和臣はそう言って2人を納得させてしまった。（だいぶ苦笑されていたけれども）

それはそれで嬉しかったけれど、「恋をしてても」と和臣が言ったのが引っかかった。

やっぱり和臣は香織の事が好きで……

「おまえら、ちっちゃくて可愛くてお似合いだよなあ。最近似てきたんじゃないか？」

和臣が自転車をこぎながら振り返って笑う。

「お似合いはそっちの方だろ！それより前見てこげよ、あぶねーから、ああほら！」

「うわっと」

電柱を避ける為にぐんとカーブを切った自転車の後ろから振り落とされそうになって、朝矢はつかまるフリをしながら力いっぱい和臣の背中を抱きしめた。

ほんとは俺、おまえの事が好きなんだ。

おまえとお似合いって言われたんだよ。

広くて温かい背中に、そっと呟いた。

和臣の上着に涙が染みないように気をつけて。

第2章（3）

変わらなかった事がもう一つある。

和臣がラジカセをかついで千葉まで遊びにくる事。

もちろん以前のように朝矢達だけではなくて、それぞれの彼女込みで4人で遊ぶようにはなっていたものの、彼女たちからしてみれば不満があるはずだった。

実際結に「たまには2人でどっか行かない？」と言われていた。

そりゃそうだよな...と思う。彼女達には悪いけれど、朝矢だって本当は和臣と2人で遊びたい。好きな相手と水入らずで過ごしたいのは誰しも同じだと思うから、結の気持ちもよく分かった。

「今度ユイの行きたいところこうぜ、2人で」

「ほんと？やったあ！トモ君やさしー」

嬉しいからコレあげちゃう、とチョコを一粒もらって、女はいつもおやつ持ってるよなあとからかいながら口に放りこんだ。

「...ね、トモ君」

何、と言おうとした時、結の顔がふっと近づいた。

軽く触れて離れたそれは、朝矢にとってのファーストキス。

いつか好きな人と、と夢見ていたキスだったのに、チョコみたいに甘くはなかった。

夏休みに入ると和臣と会える日ももちろん減って、その分和臣の事を考える時間が増えた。

結とは付き合い続けているけど、最初にキスした時からこれといった進展はない。

夏休み...そろそろそういう時期なんだろうか。

男として興味がない訳じゃないけど、キスしても何も感じない相手とそういう事ができるとは思えなかった。

久しぶりに4人で遊ぶ日は、朝矢の家の近くの海岸に集まった。

「トモ君で華奢だと思ってたけど、結構筋肉ついてるんだね」

「そういうユイはぺったんこだな」

「ちょっと、セクハラー！」

ばしゃばしゃと水のかけあいをする朝矢達を、和臣と香織が笑いながら眺めている。

仲いいな、なんて思われてるのだろう。

実際、付き合う前から仲はいいと思う。でも付き合ってから朝矢の中ではその「仲の良さ」の度合いは変わっていない訳で。それを和臣に誤解されるのが辛かった。

「まったく、胸はともかくこの脚線美は理解しなさいよ」

「え、脚線美？カオリちゃんのこと？」

「もうっ！」

もう一度朝矢に水をかけると、結は香織の方を見た。

「確かにカオリはスタイルいいよね...5センチでいいから膝下分けてほしいって感じ」

「そんなら俺もオミに身長10センチ分けてもらいたいって感じ」

何でこうも違うかね、と苦笑していると、結がふと朝矢の腕をつついた。

「ねえ、トモ君。カオリのさ.....あれ、キスマークじゃない？」

え？

キスマーク？

確かに香織の首筋がうっすら赤くなっているようにも見える。

でも、まさか。

「ここに来た時はわかんなかったけど...ファンデで隠してたのかな」

嘘だ。

そんな訳がない。

「やだぁ...あの二人、もうそんな風になってんの？」

「え、でもオミは別にそんな事...」

「言う訳ないでしょ？いくら親友でもそこまではさ」

頭の中がぐるぐるして、思考が麻痺してくる。

和臣が香織と？

嘘だ。嫌だ。

「なーんか先越されちゃったね」

結が朝矢の指を握ってくる。

言い方から察するに、結も朝矢とそういう事をしたがっているのだと思った。

本当に結の事が好きなら、こんな甘えた目で見上げられたらまさしく据え膳なんだろうけど。

「...ばーか。俺はそういう事する為にユイと付き合ってるんじゃねーよ」

「それは...でも付き合ってるんだし」

できるだけ冗談っぽく返したのに通じなかった結に腹が立って、朝矢は思わず結の手を振り払った。

「付き合ってるから何だよ？そういう事がしたいんならしてくれるヤツと付き合えばいいだろ！俺に言うなよっ...！」

いら立ちに任せて一気に吐き出した。もう和臣の事で頭がいっぱいで、何が何だか分からなかった。

結の目に涙があふれて、ぼろっとこぼれると同時に彼女は朝矢に背を向けて歩き出した。

向こうで和臣と香織の驚いた声が聞こえる。香織が結について行って、和臣は朝矢の方に走って来て...

視界がぼやけて良く分からない。

「トモ、どうしたんだよ？」

分からない。分からないよ。

ふるふると首を振ると、朝矢の目からもぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。

「ったく、泣くくらいならケンカなんかすんなよなあ...」

和臣が朝矢の頭をごしごしと撫でてくれる。

ああ、和臣に触れられればこんなにも胸が苦しくなるのに。

そのまま縋り付いてしまいたい。

けれどそれはできずに、朝矢は波打ち際に立ち尽くしてしばらく泣いていた。

第2章（4）

「ちゃんと仲直りすんだぞ。こういう時は男の方から謝った方がいいからな」

和臣にはそう言われたけれど、あれから気が引けて結に連絡を取っていない。
あんな事言うつもりじゃなかったのに。

『この前はごめん。会って話せないかな』

ようやく短いメールを送って、朝矢はベッドに突っ伏した。

好きな人に拒絶されて傷つけられるって、一体どんなに辛いだろう。

そう思うと胸が潰れそうに痛かった。

「まだ仲直りしてないって？トモ、ちゃんと謝ったのか？」

結とケンカした海岸で、今日は和臣と日陰に座って話をしている。

「うん...メールした」

「だめだよ、電話とか直接じゃないと」

それができてても根本的に解決しない事があるんだからしょうがないじゃないか。

朝矢は抱えた膝に顔を伏せた。

「そんな事だろうと思ってさ、カオリが根回ししてくれてるぞ」

「根回し？」

どうやら香織は朝矢達が仲直りできるように、また4人で遊ぶ機会を作ろうとしてくれているらしい。

4人でいると和臣達の方が気になって、この前の事もあるから気が重い。でも行くしかなかった。せめて仲直りして、これ以上傷つけない為に結とは友達に戻ろう。

それが、こんな自分を好きになってくれた結への朝矢の答えだった。

待ち合わせ場所で顔を合わせると、重い空気がのしかかってきたようだった。

「トモ」

和臣に背中を押されて前に出る。

「あの、この前はごめん...。あんな事言って、俺...」

「いいよ。私の方こそごめんね」

結は顔を上げてにっこり笑った。

「聞いたよ一、トモ君私が帰った後泣いちゃったんだって？それ聞いたら許してあげようって思って」

聞いた？誰から？と考えると、一人しかいない。

朝矢は後ろでニヤニヤしている和臣をじっとり睨んだ。

「俺はカオリにしか言ってないって。ユイちゃんにしゃべったのはカオリだよなあ」

「カオリちゃんは口が固いと思ってたよ...」

がっくりと肩を落とす朝矢を3人が笑う。結も笑っている。良かった。安心した。

あとは.....

ひとしきり買い物などをした朝矢達は、休憩がてらファミレスに腰を落ち着けた。

結が話を切り出したのはその時だ。

「あのね、トモ君。ちょっと聞いてほしい事があるんだけど」

「何？」

朝矢はあんみつを口に運びながら答える。

結の口ぶりは「荷物持って」とか「ちょっとおごって」とか、そういう時と同じようなものだった。

でも次に結の口から出た言葉は思いもよらないもので。

「私、トモ君の彼女やめる」

え？

スプーンの中の白玉が滑って、器に落ちた。

「やめる...って...え...？」

「ちょっと、ユイちゃん、今日仲直りしたばっかじゃん。トモだってすごく悩んでて...」

朝矢の横から和臣が口を出す。今日は朝矢と結が仲直りする為にこうして集まったはずだ。その席で結から別れ話が出るなんて、朝矢も和臣も思っていなかった。

「あの...和臣。驚いてるとこ悪いんだけど、私もユイと同じなの」

さらに香織までそんな事を言い出して、男二人はパニックになった。

「カオリと話したんだけどね、このまま付き合っても何も変わらないと思ったから」

結は冷静に説明し始める。

「トモ君も、木下君も優しいんだよ。私達はそれに甘えてただけなんだなって」

気付いていたんだ、結は。朝矢が結を好きになれなかった事。

でもどうして香織まで...？

和臣とはうまく行っていたんじゃないのか？

「和臣、いつも心ここにあらずって感じで」

香織も結に色々相談していたらしい。意外だった。

だってあんなに仲良さそうにしてて。それに、この前のキスマークだって。

「でもいいの。こうして仲良くなれただけでも収穫だもん。付き合っても今まで通り遊んだりできるでしょ？」

女の子というのは思った以上に強い生き物だ。

朝矢ならきっと耐えられないのに。和臣の事で、こんなにも...。

「そんな訳で、私達は帰るから」

「「え?!」」

突然席を立った女性陣に、朝矢達は身を乗り出して目を丸くする。

「私達の用事はもう済んだもん。それに女だけで行きたい所だってあるの」

ねー、と声をそろえて、あの店の新作がどうか言いながら帰って行く二人を、朝矢達はぼかんと見送った。

「...フラれちゃったなあ」

和臣が笑いながらつぶやいた。

朝矢は二人がいなくなった席と和臣とを見比べた。

「な、何だよ今の...！俺はともかく、何でオミが...」

「だからカオリも言ってただろ、心ここにあらずって」

和臣はのんびりコーヒーを飲みながらソファにもたれる。

何で？ どうして？ 聞きたい事はたくさんあったけれど、この状況ではちょっと聞きにくかった。何か考えているような和

臣を見ていると聞けなくて。

やっぱり、和臣はショックだろうか？香織の事好きだったから？

「あの、俺の事はいいからオミ…」

「ま、いいや。ちょうどよかったんだ」

カオリちゃん追い掛けるよ、と言おうとした朝矢に和臣はいつもの笑顔に向けた。

大好きなその笑顔に、思わず言葉を詰まらせてしまう。

行かないで、と言いたくなる。

「俺はトモと遊んでる方が楽しいしさー、結局両立できなかったんだ、カオリとの事と」

がしりと肩を抱かれて、頬を擦り寄せられる。

「トモがいればいいや。彼女なんていーらね」

それは和臣の強がりなのかもしれない。でも今の朝矢には嬉し過ぎる言葉で。

「う…っ…、オミー……」

「うんうん、フラれ者同士、これからもよろしくな」

思わず情けない声を出した朝矢の頭を、和臣は優しく撫でてくれた。

第3章（1）

彼女が出来た時と同様、揃ってフラれた朝矢達。

夏休みが明けると、学年の有名人（は和臣個人かもしれないが）をつった元彼女達の行動は、ある意味武勇伝として広まった。

「お前さあ、あんまり人に言うなよ。俺らがカッコ悪いだろ」

「それくらいイイじゃない。言っとくけど私はほんとに好きだったんだからね」

「...すいません」

結とは特にぎくしゃくする事もなく、友達としてやって行けそうだ。和臣も香織と変わらず接しているらしい。ちょっと妬けるけれど。

和臣とのコンビを本格的に復活させた朝矢には、どうしても気になっていた事があった。

香織の「和臣の心ここにあらず」発言。

夏休み明けのとある昼休みに、他目的ホールでだべりがてら思いきって聞いてみた。

友達としてだ。あくまで友達として。誰だって不思議に思う事じゃないか。朝矢が聞いたって不思議じゃないだろう。そう言い聞かせて。

「え？カオりにフラれた理由？何、今更」

「だって、お前ら上手く行ってたんじゃん...その、最後まで.....」

軽くしまったと思ったけど、もう遅い。和臣の顔がゆっくりこっちを向くのを、朝矢は死刑宣告でも待つ気分で見ていた。

「何だよ、最後って」

いぶかしげな顔をして朝矢を覗き込む。

「い、言わす気かよ...！見たんだからな、海行った時に。キ...キスマーク.....」

「キスマーク.....」

和臣はしばらく考えこんで、ぼんと手を打った。

「ああ、あれか」

「そうだよあれだよ！オミだろ？オミが...ぶっ」

まくし立てる朝矢の顔に和臣の大きな手がかぶさる。

「勘違いすんな。あれは虫刺されの跡だよ」

真相はこうだ。

香織は海に行く数日前に首を蚊に刺されて、跡になるのを相当気にしていたらしい。

気をつけて薬を塗ったりしていたが、結局かゆみが取れてもなかなか赤みが引かず、ファンデーションで隠していたんだそうだ。それが海で遊ぶうちに落ちて、赤くなっているのが見えてしまったと。

「...マジかよ。嘘みてえ。漫画かよ」

「マジだよ。カオリとはそこまでしてないって。してたら別れてない」

そうか。そうだったんだ。よかった....。

胸のつかえが取れたみたいだった。

最後までしてたら別れていないというのが和臣らしい。和臣なりに真面目に付き合っていたんだらう。だからしなかったんだ。大切にしていたから？それとも...

「俺はちゃんとカオリの事、見てなかったんだよな」

朝矢の心を読んだみたいに、和臣が答えを示して来た。

「一緒にいてもじっくり来なかったっていうか、何か別の事考えてる事が多くてさ。話聞ってる？って何度言われたか」
考えればフラれて当然だよなと言って、和臣は小さく息を吐いた。

「何か別の事って...何考えてたんだ？」

「ん？ト・モ・の・こ・と」

和臣はにっと笑って、朝矢の鼻先を指で弾いた。

一気に血が集まったように顔が熱くなる。黙って赤面していると変に思われそうで、朝矢は照れ隠しに和臣の両頬を思いきり引っ張った。

「冗談を言うのはこのクチかっ」

「いでででで！」

しばらくばたばたと暴れた後、和臣は朝矢の両手を引き剥がした。

「冗談じゃないって。言っただろ、トモと遊んでる方が楽しいって」

それは、彼女よりも朝矢を選んでくれたと解釈していいのだろうか。

朝矢が望んでいるような意味ではないのだとしても。

「トモがいれば彼女なんかいらんって言ったじゃん」

「言った...っけ...」

あの日ファミレスで言われた事を思い出して、何度も頭の中で反芻した。

そうだ。色々あり過ぎて訳がわからなくて泣いてたけれど、あの時和臣は確かにそう言った。

「だからさ、トモももう彼女なんか作らないで、俺といっばい遊んでくれよ」

抜け駆け禁止な、と和臣は笑う。

どっちかっていうと、また次に彼女ができるんなら絶対和臣の方だと思うけど。

「よお、お二人さん。相変わらず仲のよろしいことで」

俊介が通りすがりに朝矢達をからかっていった。

和臣の手に掴まれた朝矢の手が熱い。

第3章（2）

日曜日。

まだ夏の名残りをとどめる陽射しが照りつける中、朝矢は和臣と一緒にうちの近くの公園に来ていた。お互い彼女がいた時は4人で遊んでいたから、2人だけで来るのはずいぶん久しぶりだ。

「やっぱ楽だなあ、トモと2人だと」

和臣が朝矢の心の中を見透かしたように言った。その手にはラジカセ。

中3の夏以降、受験勉強が本格化してからは毎週のようにラジカセを担いで...という事はなくなり、それと共に遊び方も少し変わって来ていたけれど、たまには思い出したように「何か新しい事やろう」なんて言って持って来たりする。

「トモもかなり上手くなったし、このままやめるのも勿体ないだろ。文化祭でやらない？」

後夜祭のステージパフォーマンス募集、というポスターが校内に貼ってある。それを見た和臣が2人で出ようと言い出したのはつい先日の事だった。もともと人前で何かするのがあまり得意ではない朝矢はそれこそ最初は渋ったものの、結局和臣の頼みでは断れないというのが実際の所だ。

「トモは運動神経いいから、何かこうアクロバティックに...」

和臣の中ではすっかり出来上がっているらしい。でも...

「俺が目立ってもしょうがないだろ？オミの方が人気者なんだからさ」

これは朝矢の正直な意見だ。どうせなら人気者の和臣が目立った方がいい。というよりむしろ、朝矢も和臣のパフォーマンスを観客として見たい。

「だって俺、トモと違って飛んだり跳ねたり苦手だもん。それに、トモは結構アイドルなんだぜ？」

和臣は朝矢の頭をくしゃくしゃと掻き回して、意味ありげににんまりと笑った。

「自分じゃ気付いてないかもしれないけど、ユイちゃんみたいにトモの事可愛いなって思ってる子もいるし、女子だけじゃなくて男子にも...」

「は？」

「アブナイ奴がいっぱいいるんだよ、気を付けな」

くしゃくしゃにした朝矢の頭をぼんぼんと叩いて、和臣は小さい子に言い聞かすような口調で朝矢に注意を促した。そう言われても、いまいちピンと来ないけれど...別にモテている気もしないし、それに男子にもとは何なのか。

「アブナイ奴って...」

「そりゃー、トモを狙ってる男なんてアブナイに決まってるだろ。本っ当に気を付けろよ」

ああ...そういう事か。

つまり、男が男にそういう気になるなんて正常じゃないって事。

じゃ、俺は？

中2の時からずっと和臣が好きで、同じ高校まで受験しちゃって未だに片思いの俺は？

和臣からしたら、自分もただの危ない奴なのだろうか。

ぱっと和臣の手を振り払って、近くのぶらんこに飛び乗った。

勢いをつけてぐんぐん高く漕いで行く。目に映る景色が前に後ろに流れて気持ち良かった。

このまま、胸の隅に生じたもやを吹き飛ばしてしまえば。

「高校生になってもトモはぶらんこ似合うんだなー」

のんびり笑う和臣を横目に見て、朝矢は足元を蹴って鎖から手を離れた。

一瞬、ふわりと浮く感触。そのまま着地?するはずだったのに。

爪先が何かに引っ掛かってバランスを失った。

(やばっ……！)

咄嗟に腕で庇おうとしたけど間に合わなかった。次の瞬間には強い衝撃と共に地面に叩き付けられていて。起き上がろうとするとくらくらと来て、頭を打ったんだろうかと思った。

「トモ！大丈夫か？」

和臣が駆け寄ってきて抱き起こしてくれる。公園にいた他の人たちも遠巻きにこちらを見ていた。

「だ、だい…」

しゃべった途端に頬に鈍い痛みが走った。触ってみると土で汚れている。和臣が持っていたタオルで軽く払ってくれたけど、その感触すらも痛みが変わった。

「とりあえずトモン家帰ろう。痛かったら言って」

和臣は朝矢を抱えて走り出した。

結局そのまま病院に直行になった朝矢は、左頬の骨に軽いひびが入っているとの診断を受けた。

痛み止めがきいているけれど、打った所は時間がたつほど腫れて来ている。

状況を説明する為に一緒に病院に来た和臣は、何度も朝矢の親に頭を下げていた。

「オミが気にする事ないよ。そのうち治るんだしさ」

そう言っても、和臣は黙って下を向くばかりで。

本当に和臣が悪いとは思っていないし、和臣が責任を感じて辛そうにしているのが朝矢にはたまらなかった。

「明日、気まずいかなあ…」

絆創膏の上から頬をさすってみる。

ケガじゃなく、心がちくちく痛んだ気がした。

第3章（3）

翌朝、和臣はいつものように自転車で駅前まで迎えに来てくれていた。

「おっ、今日もお迎えごころーさん」

なんておどけてみたけど、反応がいまいちで。

「痛む？」と聞いた後は学校に着くまで一言も口をきかなかった。

「気にすんなよ」「菓飲んでるから大丈夫だよ」「手足は何ともないから不自由ないよ」

何を話し掛けても和臣は無言で。

学校に着く頃には朝矢は泣きたい気分になっていて、下駄箱で俊介を見つけると思わずそちらに駆け寄った。

「おはよーさん。うわ、どーした？」

俊介はちょっと驚いた後、絆創膏の上を緩く撫でた。

「何か大変な事ないか？俺にできる事があつたら何でも言えよ」

「大丈夫だよ。気にすんなって」

変わらない俊介の態度に安心してしまう。

朝矢達の横を、和臣が何も言わずに通り過ぎて行った。

「...いいのか？」

和臣の背中を見送った俊介は、その視線を朝矢に落とした。

いいかと聞かれれば、いい訳がない。

でも、朝矢にはどうしたらいいのかわからない。

和臣が何を考えているのか。

「何か、気にしてるみたいで。ケガした時一緒にいたから」

「ふうん」

俊介はもう一度和臣が去って行った方に目をやると、

「朝矢の気持ちは気にしてねーんだな」

ぼそりと呟いて、肩を竦めて小さく笑った。

教室でも、いつもはあれこれと構ってくる和臣が全然こちらに来るそぶりもなく、朝矢は何となく俊介の後ろについて過ごした。

「いいの？あいつんどこ行かなくて」

「うん...話し掛けづらいし」

そうだ、自分は。

和臣が話し掛けてくれなければ、こちらから話し掛ける事もままならない。

和臣が離れて行ったらこんなにもあっさりと、昨日までが嘘みたいに。

俺って、オミの何だったんだろう.....。

親友だったはずなのに、たった一つの事で壊れてしまうなんて。

トモがいれば彼女なんかいらんって言ってくれたのは？

ぼんやりと和臣を見ると、気のせいかもしれないけど周りの方が人が多い気がした。

「おい」

呼ばれてはっとする。

俊介は朝矢の髪を乱暴に掻き回し、少し怖い顔をして

「お前、泣くなよ」

と言った。いつもみたいな茶化すような目じゃなくて、真剣に。

「誰が泣くかよ。バカにすんな」

朝矢は俊介の手を振り払うと勢いよく席を立った。椅子がガタンと跳ねたその音にも、和臣はこっちを向く事はなくて.....。

「トモ、帰ろう」

耳を疑った。目も疑った。でも確かに目の前には和臣がいて、今朝矢に向かって「帰ろう」と言ったはずだ。なんで。どうして？さっきまで、終礼が終わるまで目も全然合わせなかったのに。

「お前ふざけん...」

「俊、いいから」

それでも、俊介が和臣に掴み掛からんばかりに前に出たのをとっさに止めてしまった。

こんな状態でも和臣と一緒にいられる時間があるなら無駄にしたくない。和臣の方から一緒に帰ろうって言ってくれたんだ、きっと大丈夫。

「サンキュ。帰ろうぜ」

朝矢は無理矢理笑顔を作ってみせた。けど。

結局は登校の時と同じで、自転車に乗っている間じゅう全然口をきかなくて。

途中でクラスメイトを追い越した時、和臣が明るく挨拶をしているのがひどく引掛かった。そんなのいつもと同じ事なのに。

変わったのは、朝矢たちの間だけ。

広くてあったかくて大好きなはずの和臣の背中が、まるで壁のように感じられた。

「じゃ、気を付けて帰れよ」

駅で朝矢を下ろしてすぐに走り去ろうとする和臣の袖を思わず掴んで引き留めた。

このままじゃだめだ。何か話すとか、せめて.....

ぽん。

頭に和臣の手が置かれて、顔を上げると和臣が笑った。でもそれはいつものような笑顔じゃなくて、寂しそうな、悲しそうな...

「また明日な」

朝矢が何も言えないでいるうちに、和臣は帰って行ってしまった。どんどん小さくなっていく和臣の背中が涙で滲む。なんであんな顔するんだよ。なんで何も言ってくれないんだよ。なんで.....

「訳わかんねえ...」

涙がこぼれないようにぐいっと拭い、改札の中に駆け込んだ。

翌日からも和臣との「無言の登下校」が続いた。正直かなりきつかったから逃げてしまう事もできただろうけれど、和臣と接しない事の方が辛いように思えて、それはどうしても出来なかった。

「よお、おはよーさん」

登校すると下駄箱で俊介が待っていて、朝矢を引っ張って行くと言うパターン。

そのまま和臣と朝矢は、下校までほとんど顔を合わせない。

そして帰りは何か言いたげな俊介に挨拶をして、和臣の自転車の後ろに乗る。

月曜からずっとそれが続いて、週の最後...金曜を迎えた。

第3章（4）

「朝矢さあ、明日どーすんの？いつもあいつと遊んでんだろ？」

「あ...」

俊介に言われて気が付いた。明日は土曜。土日両方とは言わなくても、どちらかはほとんど必ず和臣が来ていた。今度の週末はどうなるんだろう。こんな状態じゃ.....

「...わかんねーや」

正直、本当に分からなかった。今の状態で自分から声をかけるのは無理そうだったし、かと言って和臣がいつものように遊びに来るとも思えなくて。でも、毎日の送り迎えを変わらずにしてくれるという事は、来るだけは来るつもりなんだろう。それで元に戻るのなら嬉しいけれど。

「じゃあさ、明日朝矢にちょっと付き合ってくんない？買い物」

俊介が朝矢の考えを遮った。.....どうしよう。気分転換にはなるかな...気分転換なんて言ったら悪いけれど、そこそこ仲はいいのに一緒に出かけた事なんてなかったから、たまにはいいかもしれない。

「ああ、いいよ。昼飯は俊のおごりでな」

「『いいよ』以外は聞かなかった事にしとく。じゃ、言いに行くか」

突然歩き出した俊介に腕を引っ張られて、朝矢は転びそうになるのを踏み止まった。

「言いに行くって、何」

「え？あいつにだよ。一応言っといた方がいいだろ」

「ちょっ、何勝手に...いいってば、俊...！」

抵抗むなしく、ずるずると引き摺られて和臣の前まで来てしまった。俊介が声をかけたけれど、朝矢は和臣の顔が見られない。

「明日、朝矢借りるぜ。ちょっと買い物付き合ってもらいたいんでね」

「ああ...トモがいいんなら、俺は別に」

本来なら何でもない事なんだと思う。別にクラスメイトと買い物に行くぐらい、わざわざことわる事でもないんだから。それでも、どことなくそっけなく聞こえた和臣の返事が、朝矢の心に小さな傷をつけた。

俊介との買い物は色んな店をぶらつくだけぶらついて、ファーストフード店に落ち着いた。

「何も買ってないじゃん。これからまたどっか行くのか？」

昨日言った通り俊介のおごりになったので、遠慮なくデザートつき。そのアップルパイを食べながら、疑問に思った事を聞いてみた。「買い物に付き合っほしい」とは言ったものの、俊介はどの店もあれこれ手に取るばかりで何をかう風でもない。

「いや、買い物つっても欲しい物があつた訳じゃないんだよね。どっちかっていうと朝矢と話したかっただけ」

俊介も自分のアイスをスプーンでつつきながら答えた。

話ならこの1週間、普段の何倍もしている気がする。...和臣と話していない分。和臣が親友なら俊は悪友とでも言うべきか、俊介の話は下らなくてばかりしいけれど面白くて飽きない。もともと話好きというのもあるのだろうが、最近は特に...

「俊、もしかして俺に気遣ってる？」

「別に今さら気遣う気もねーけど、気にはなるだろ。お前らおかしいもん、今週」

そんなの俺が一番よく分かってるよ。

でも、だからどうしろって？

朝矢には何もできない。今の和臣に何かして、拒絶されるのが怖い。

和臣の優しさにずっと甘えてきたのだ。初めて会った時からずっと。

「俊、つついてないで食べよ。アイスが可哀想じゃん。いらねーんならもうぞ」

話を逸らそうとして俊介のデザートグラスに伸ばした手を、逆に掴まれた。

「何だよ、食うの？」

「お前さ、」

俊介の視線が真直ぐに朝矢を捉えた。

「いつから好きなの、あいつの事」

周囲の音が全て消えた。

何て言った？今…… 何で知って……

こめかみの辺りを、嫌な汗が一筋伝う。

第3章（5）

「ま、いつからなんて別にどうでもいいけど」

手を解放された後も、朝矢はしばらく何も言えずにいた。和臣本人にだって知られたらいけないと思っていた事を、俊介には気付かれていた。

ここは形だけでも否定しておくべきなんだろうか。友達以上の感情はないと。親友が急に離れて行って寂しいだけだ、それでいいんじゃないか。

「あの、俊」

「俺には隠し事すんな」

朝矢の考えを見透かしたように俊介が遮った。

俊介の目に映る自分は、ひどく狼狽しているように見えた。いや、実際狼狽していたんだ。握った拳が小さく震える。もう誤魔化しようがなかった。

「で...でも、変だと思うだろっ...、だって俺...」

「俺が言いたいのはそんな事じゃない」

震える手をもう一度上から強く押さえられる。まるで心臓を押さえられているような息苦しさを感じて、朝矢は息を詰めた。

「お前、辛そうで見てるんない。何かあったら俺に言えよ。無駄にあいつの事で悩むな」

いいな、と言う気迫に押されて思わず頷いた。これは、相談する相手ができたといい事になるのだろうか。恋した相手が男だなんて家族にも言えなかったし、俊介がある程度の理解を示した事にほっとしている自分がいた。

「さてと、出ようか」

俊介がやにわに立ち上がる。朝矢を見下ろす顔はさっきまでと違う、いつもの彼に戻っていた。

「まだ付き合ってくれんだろ、買い物」

「あ...うん」

朝矢も立ち上がって俊介の後に続く。

手をつけられないままほとんど溶けてしまったアイスがグラスに雫を作って、何だか泣いているみたいだった。

次の日、朝矢は一日携帯の電源を切って過ごした。

俊介に和臣への気持ちを認めた事で、自分自身に対してもそれを再認識させる結果になった。心の整理がつかなくて、和臣に電話をかける勇気もない。逆に携帯の電源を入れたままにしておいて、和臣からの連絡がないのをこの目で見るのも嫌だった。

わがままで、弱い自分。

部屋の窓を大きく開けると、海に近いせいか潮の香りが流れ込んできた。鼻の奥がツンとする。慌てて窓を閉めて、ついでにカーテンも閉めてベッドに潜り込んで丸くなった。

きっと明日も和臣は駅で待っていて、朝矢は自転車の後ろに乗るんだろう。

目を閉じてもぐるぐると和臣の事ばかり巡って、全然休まらなかった。

「...おはよ」

「ああ、おはよう」

和臣とぎくしゃくし始めて1週間。週が明けても状況は変わらなかった。朝矢はもう、半ば諦めていた。正確には諦め切れていないから、こうして毎日和臣の自転車に乗っている訳なのだが。

頬のケガはそんなに酷いものではなくて、もう腫れは引いてほとんど治ってきている。擦り傷も絆創膏がいらないうらいになって。もし和臣が、あんな態度を取る中で自転車の送り迎えだけは止めない理由がケガにあったとしたら。治ってしまったら、もうそれすらなくなってしまうんじゃないか...そんな不安が胸を過り始めていた。

「よっ。土曜はどうもな、長々付き合ってもらって」

俊介は今日も下駄箱の前で待っていて、朝矢を見つけると近付いて肩に手を回して来た。

「なあ、また今度どっか行こうぜ。昼飯おごるからさ」

「ああ、うん...」

そんなやり取りをしているうちに、和臣は先に歩いて行ってしまふ。和臣が見えなくなると、俊介は朝矢の肩から手を放した。そして、先週の月曜と同じように、和臣が去って行った方を見て小さく笑ったような気がした。

俊介には朝矢が和臣の事を好きだというのがばれてしまったので、思いきって今の不安を相談してみた。

「別に跡とか残らないんだろ？朝矢の可愛い顔が無事で何よりじゃん」

俊介は見当外れな事を言って、朝矢の頬を包み込むように撫でてくる。その撫で方が何かこう、まるで恋人にするような...そのままキスでもされそうな感じがして、朝矢は慌てて振り払った。

「やめろよっ...お前、今日やたら俺に触るし...、もしかしてからかってんのか？俺が、その...やっぱ、変だって.....」

朝矢は別に男が好きなのは訳ではなく、たまたま和臣を好きになっただけだ。確かに自分でもどうしてそうなったのか分からないし、まして当事者でない俊介には朝矢が特殊に思えるのかもしれないけれど...

「ごめん、違うって。そうじゃなくて」

俊介が顎で示した方を見ると、ちょうど教室から出て行く和臣の姿があった。

「安心していいと思うぜ。あいつには朝矢が心配してるような事はできっこねえよ」

そう言うと俊介はニヤッと笑ったけれど、妙に自信たっぷりに言い切る根拠が分からなくて、朝矢はただ首を傾げるばかりだった。

第3章（6）

その日の放課後、和臣は朝矢に自転車の鍵を差し出して来た。

「俺ちょっと用事あるから、校門の前まで自転車回して待ってて」

「え...」

ここ最近和臣とは話しても一言くらいだったから、久しぶりにまともに話し掛けられて固まってしまった。同時に、この気まずさを保ったまま待ってたくないという気持ちがじわじわと湧いてくる。

「あ、だったら俺歩いて...」

「待ってて」

和臣の強い言葉に簡単に遮られて、朝矢は困った顔をして和臣を見上げる事になった。

その目の前に鍵をぐっと差し出され、思わず手を出す。かちゃりと音がして朝矢の手に鍵が落ちた時には、和臣は「すぐ行くから」と言い残して走って行った。

和臣の考えている事が分からない。

そんなにまでして朝矢と一緒に帰らなくてもいいのではないか。

だったら学校にいる時にももっと.....

自転車のハンドルを握ると、そんな訳ないのに和臣の温もりが残っているような気がして切なくなった。もうだいぶ汚れている。朝矢を送り迎えする為に毎日使って。乗っている最中にパンクして、二人で自転車屋まで担いで運んだ事もあった。

和臣とはもう、数え切れない程の思い出がありすぎる。今更もう.....

「よお、お待たせー」

待っていた朝矢に声をかけたのは俊介だった。見ると、和臣と一緒にいる。廊下で一緒になったのでそのまま来たのだという。それにしても、仲良くしゃべりながら来たという感じでもないけれど。

俊介は自転車の後ろに跨がった朝矢の肩をぼんぼんと叩いた。

「じゃあな、また明日」

そして、また和臣に向かって意味ありげな笑みを浮かべて。

和臣はそれには答えずに自転車を発進させた。

ずっと無言のまま漕いでいた和臣が軽く振り返ったのは、駅まであと少しという所だった。

「トモ、今日ちょっと時間ある？」

そう聞こえた次の瞬間、自転車は駅のすぐ手前で方向を変えて大きく曲がった。今まで通った事のない道を進んで行く。

「ちょっ...どこ行...」

「大丈夫だろ？そんなに時間かからないから」

「時間はいいけど、何っ.....」

複雑な気持ちを抱きながら、朝矢は和臣の背中ごしに知らない景色を見ていた。

しばらく走り続けた自転車は、やがて小さなアパートの前で止まった。

何を言う暇もなく和臣に引っ張られるように2階の部屋の前に来る。

「...ここって...」

「俺んち。入って」

ドアを開けられ、玄関に足を踏み入れる。

初めて入った和臣の部屋は、想像していた通りきれいに片付けられていた。ミニテーブルの前に腰を下ろすと、和臣が冷たい麦茶を出してくれて横に座った。

「家族以外で部屋に入れたの、トモが初めてだよ」

そう言われたのは喜んでいい事だと思う。こんな状況じゃなければ舞い上がっていたに違いない。でも今は...この1週間ほとんど話もしてなくて、どうしたらいいのか分からなくて、なのに突然部屋に連れて来られて...落ち着かなくて緊張して、何だかひどく居心地が悪い。

「なんで.....」

そんな一言が自然と口をついて出た。この1週間に何度も何度も頭に浮かんだ言葉。いくら考えても、朝矢には答えが出せなかった。

「俺のケガの事、まだ気にしてんのか...?全然話してくれねーし、なのに自転車の送り迎えには来るし、今だって...俺わかんねえよっ.....」

頭のごちゃごちゃを上手く説明できる訳もなく、朝矢は唇を噛んで下を向いた。

横で和臣が麦茶をぐいっと飲み干す。グラスが置かれた音にまで過敏に反応してしまい、体が竦んだ。

もしかしたらうっとおしいと思われたかもしれない、あんな風に責めたりして。

今更不安になって、握った掌にじっとりと汗が滲んでくる。

息を殺してじっとしていると、和臣がゆっくりと口を開いた。

第3章（7）

「じゃあ、1個ずつ答える。

ケガの事は、気にするなって言われても無理。

トモ見てると辛かったから、学校では何となく避けてた。

でもトモと接点なくなるのが嫌だったから、送り迎えはやめなかった。

ここに連れて来たのは、ちゃんと話したかったから」

「分かった？」

そう聞かれて朝矢は首を横に振った。

だって、本当に分からなかった。最悪のケースばかり考えていたから、予想と全く違う答えを提示されてますます混乱した。

「な...何だよそれっ...オミは悪くないって最初っから言ってんじゃないか...、それに俺見てると辛いってのも...何でオミが辛いんだよ？」

結局はまた質問攻めのようにになってしまう。おまけに、最後の方は涙声になってしまっているのが自分でも分かるくらいだった。せめて涙が零れないようにと必死でこらえて、ぐっと和臣を見上げる。

「俺だってオミにあんな態度取られて辛かったのにっ...人の気も知らないで...！」

勢いに任せてぶちまけると、和臣に両肩をぐいっと掴まれた。怒らせた...！と思い、反射的に目を瞑る。

「じゃあトモは、目の前で好きなやつがケガしても平気でいられるか？そいつが気にするなって言ったら、はいそうですかって聞けるか？顔腫らして絆創膏してんの見て、毎日フツーにできるのかよ...！」

和臣にこんな強い口調で物を言われるのは初めてだった。恐る恐る目を開けると和臣は怒りにも悲しみにも取れるような色を湛えた目をしていて、その中に泣きそうな顔の朝矢が映っている。

「だって...だって俺、」

和臣に怒鳴られた事に動揺してしまって、言われた事はろくに入ってきていないし、ちゃんと話せない。何か言おうとしては飲み込んで、一緒に涙もこらえている感じだった。

「ほんとに、オミが悪いなんて思って...」

「だからそう言われても無理なんだって。聞いてた？俺の話」

「っ聞いてたよ...！でも、わかんない...」

「ほんとに分らない？」

もう一度、肩に置かれた和臣の手にぐっと力が入った。また何か言われるのかと身構えたけれども、和臣は怒っている様子じゃない。むしろその目に吸い込まれてしまいそうだった。

「好きなんだよ、トモのこと」

目の前にいる和臣から発せられた言葉なのに、随分遠く聞こえた。

もしかしたら幻聴かもしれないと思った。

白昼夢を見ているのかもしれないとも思った。

ただ、信じられなかった。

「嘘だ…」

とっさに出たのはその一言だった。同時にまぶたがじんと熱くなり、涙が堰を切ったように溢れて頬を伝い落ちる。

「嘘じゃないよ」

「嘘だ…っ…だってオミが……そんな訳、ない…」

カッコよくて、人気者で、みんなに優しくて、朝矢の自慢の親友で。

朝矢が抱いてしまったのは、絶対叶わない想いはずで……

「なんで泣くの」

「だって…、だってこんなの…」

ぼろぼろと零れる涙を和臣の指先が何度も拭い、頬を優しく包み込む。指先が瞼に触れて目を閉じると、唇が重なって来た。

「……っ…」

驚いて声も出ない。

触れあった唇を押し付けるだけのキスだった。

閉じた瞼からまた一筋、涙が流れ落ちたのが分かった。

「好きだよ…トモ。親友だけど、それ以上に大切に思ってる」

視界が涙で霞んでいたけれど、和臣はしっかりと朝矢の目を見ながら言ってくれていた。

和臣の口からこんな言葉が出て来るなんて、ずっとずっと思いもよらなかった。

親友として他の皆よりも少しばかりは近い位置にいらればいいと思っていたのに、朝矢の心はどんどんワガママになっていて、でも和臣は今それを受け止めようとしてくれている。

「嘘みたいだ…オミ…っ」

縋り付いた朝矢の背中を和臣はしっかりと抱き締めてくれた。

「嘘じゃないから。もう、泣かさないから……」

囁くような静かな声とは裏腹に、朝矢を抱く腕に力が籠る。

和臣は朝矢が泣き止むまで、なだめるようにずっと抱き締めてくれていた。

第4章（1）

思わぬ形で和臣に告白され、朝矢達にはとりあえず今まで通りの日々が戻って来た。

宙ぶらりになっていた「後夜祭に出よう」という計画も再始動して、昼休みや放課後も屋上庭園で時間ギリギリまで練習している。一緒にいられる時間がまた増えたのは嬉しいけれど……

その前に、驚いた事が一つあった。

朝矢を家に連れて行って話をするように和臣をけしかけたのは、俊介だったらしい。

あの日、用があるからと朝矢を待たせた和臣は俊介と一緒に戻って来た。用というのが実は俊介からの呼び出しで、朝矢の事で色々と話をしたんだそうだ。

二人とも詳細は教えてくれないけれど、大まかに言うと和臣は俊介から仲直りしろと強く言われたという事で……

内向的な面がある朝矢の性格を分かった上での俊介の気遣いだったんだろう。

そういう経緯もあって、俊介には朝矢達が付き合い始めた事を和臣の了解も得て話してある。

もう一つ驚いた事。

好きだと言われて嬉しい反面、気になったのでいつからそうだったのかを聞いてみたら。

「確信持ったのは最近だけど…中3の時には今と同じ気持ちだったかな」

高校受験の志望校を朝矢に教えてくれたのは、もしかしたら同じ所に来てくれないかと思ったから。

香織と付き合ったのは、朝矢がどんな反応するのか気になったから。

今になって思えば、色々な事に関して朝矢が基準になっていたらしい。

全然気付かなかった。朝矢は自分の気持ちだけでいっぱいいっぱい。

「もっと早く言ってくれれば、俺こんなに悩まなくて済んだのに…」

やっと止まった涙を袖で拭きながらぼやいた朝矢を、和臣はもう一度抱き締めてくれたのだった。

それ以来、何もない。

そもそも二人きりになる時間もない。あれから2週間経つけれど、和臣の部屋には行ってない。週末は和臣が朝矢の地元まで来て、夕方に帰って行く。思いきって「俺が行こうか」と言ってみたけれど、何だか上手くはぐらかされたような…

…

告白されたのもキスしたのも夢だったんじゃないかと思うくらい、ただの親友だった頃と変わらない日々。

もしかして、あの時はああ言ってくれたけど、後で冷静に考えたらやっぱりだめだったとか。香織のようなきれいな子にも好かれる和臣が、男となんて。

（素直に喜べる状況じゃないのかな…）

休み時間にトイレで一人、手を洗っている所に俊が入って来た。

「よお。どうした？」

俊介が自分の用を済ませて手を洗うのを、朝矢は何となく待っていた。朝矢達の事を知っている俊介にだったら、それとなく相談できる気がしたから。でも、どう切り出していいか分からない。

「あいつと一緒にじゃねーの？」

「さすがに連れションはないだろ...」

そうだよな、とケラケラ笑って、俊介は悪戯っぽい目で「でもさ」と続ける。

「今みたいな状況だったらチャンスじゃん」

「チャンス...って、何」

「個室でイイコト...とかさ。スリルあるぜー」

「なっ.....！」

俊介の言わんとする事が分かった途端、かっ顔が熱くなる。ちょっと想像してしまって、慌てて頭から追い出した。

「ったく、からかうなよっ」

イイコトも何も、そんな事を考える程の進展がない。そう思うと自然とため息が漏れた。

和臣が嘘を言うなんて思えないけど、さすがに自分のような人間を好きになったと言っても、好きの意味が違うのかもしれない。だから...

「...何だよ、上手く行ってねーの？」

俊介が俯いた朝矢を覗き込んで来る。

上手く行っていない訳じゃない。と思う。少なくとも以前と変わらず仲はいいし、悪い所なんてひとつもないはずだ。

でも、心の片隅にもやもやと居座るこの物足りなさは何だろう。

「なあ俊、上手く行かってどういう事だと思う？」

「は？」

朝矢の質問に、俊介は何を聞くんだとばかりに目を丸くした。

「そんな事俺に聞くなよ。お前やあいつがどう思うかだろ？」

「それはそうだけど...」

ますます俯いて言葉を濁す朝矢に、俊介は少し語気を強めた。

「じゃあお前、あいつとどうなりたい？何がしたいの？それがわかんなきゃどうにもならねーよ」

どうなりたい？何がしたい？

そういえば、自分が和臣に求めているものはなんなのだろう。

片思いしていると思っていた頃は、親友としてでもいいから一緒にいらればそれでいいと思っていた。

和臣が好きだと言ってくれて、抱き締めてキスまでしてくれて、すごくすごく嬉しかった。

その時点で、もう自分が望んだ以上の事は叶っているはずなのだ。

それなのに.....

「ま、あんまり難しく考えんなよ」

俊介は朝矢の肩を軽く叩いて、ニヤリと笑った。

「俺なら早いとこエッチに持ち込むけどな」

「ばっ...何言ってるんだよこのバカ！」

殴られるのをするりとかわして逃げるようにトイレを出た俊介を追って朝矢も駆け出す。

廊下を走っている間に、予鈴が鳴った。

第4章（2）

「トモ、力抜いて...楽にして」

制服のシャツの前を開けられ、和臣の骨ばった手が滑り込んで来る。触れるか触れないかの微妙な所で緩く撫でられて、全身に鳥肌が立った。

「感じてるの？可愛い...」

「ち、ちが...っ、あ...！」

首筋にかかる髪をかき上げられて吸い付かれ、和臣のシャツを掴んだ手がびくりと震えた。そのまま舌を這わされると、柔らかく濡れた感触が触れる度にそこから熱が広がって行く。

「あ...オミ.....オミ...っ...」

ぞくぞくと沸き上がる未知の感覚に身体を支配されて、目の前が少しずつ白く染まって行く。必死に和臣にしがみついて、何度も名前を呼びながら、朝矢は.....

「.....っ！！」

はっと目を開けると、辺りは暗闇だった。手探りで目覚ましを探して見ると、まだ夜明けには程遠い。

（なんて夢.....）

額に浮かんだ汗を拭って深くため息をつく。べったりとはりついたパジャマがうっとおしい。少しでも涼しくしようと布団をめくって、身体の変化に気がついた。

（...嘘）

パジャマのズボンを微かに押し上げている自分自身。さっきの夢を思い出すと、くっと角度を増したように思えた。少し迷ったけれども、布団を頭からかぶり直して、そろそろそこに手を伸ばす。指先で触れると思わず声が出そうになって、慌てて口元を押さえた。

「ん...っん...」

ゆるゆると手を動かすと、きつく閉じた瞼の裏に和臣の姿が浮かんで来る。夢の中で朝矢を抱いていた、あの和臣の姿が。すぐに手の中が濡れてくるのを感じて、朝矢の身体は一層熱くなった。

いわゆる思春期だし、こういう自分自身を慰める行為をした事がない訳じゃない。でも和臣の事を考えながら...しかもした事もないセックスを勝手に思い浮かべてなんて...浅ましくて後ろめたいのに、いつもより感じてしまっただけで止められない。

『トモ、可愛いよ...気持ちいい...？』

「んんっ...ふ...はあっ.....」

夢で囁かれた和臣の声が耳の奥に響いて、頭の芯が甘く痺れる。まるで和臣にされているような倒錯的な快感に、朝矢は夢中で自身を擦り上げた。

『好きだよ、トモ...愛してる...』

「は...あ...オ、ミ...っ、んく.....っう...！」

目尻にたまった生理的な涙が流れ落ちた瞬間、朝矢の身体は大きく痙攣した。手の中に放たれたものを拭う気力もない程の強い絶頂感に震えてしばらく動けなかった。

（何考えてるんだよ、俺は...）

荒い息を吐きながら、どうしようもない自責の念に駆られる。

——俺なら早いとこエッチに持ち込むけどな

(俊が変な事言うからだ)

重い身体を起こして後始末を済ませると、朝矢は丸くなって再び目を閉じた。でも、全然眠れなくて...

その日は、和臣の顔をまともに見られなかった。

9月末には前期の期末試験があって、試験後は「秋休み」と称される短い試験休みがあった。11月3日の後夜祭までにまとまった休みはそれが最後なので、和臣はその間に内容をしっかりまとめておきたい考えらしい。

「よーし、期末なんか適当でいいや。早く秋休み来ねーかなー」

どこかのテレビ番組じゃないけれど、色のついたボールを流す形式でその場で投票が行われ、優勝者には賞品も出るという事だった。どこかでその情報を仕入れてきた和臣は、本気で優勝を狙うつもりらしい。

張り切る和臣の背中を眺めて、朝矢は少し置いて行かれているような気分だった。

試験期間中は午前で終わってしまうので、午後は教室の机を寄せたり屋上庭園に出たりして、クラスメイトにもあれこれ言われながら練習をして。

「コラ、試験中っていう自覚あるのか？赤点取ったら後夜祭出さないぞ」

3日目には呆れたように先生に小言を言われて、そそくさと帰り支度をしたけれども。

「どうする？何か食って帰ろうか。ラーメンとか」

駐輪場に向かう途中、和臣が後ろを歩く朝矢を振り返る。いつもなら喜んでOKするのだが...

「その後は...？」

「？その後って？」

「まだ、いつも帰ってる時間までだいぶあるじゃん。だから、オミン家...行くとか...」

友達の家遊びに行くなんて何でもない事なのに、妙に意識して語尾が弱くなってしまふ。ちらりと見上げると、和臣は答えを探しているようだった。

「あー...俺んち、今散らかってるし...」

「別に気にしないよ、オミの『散らかってる』なんてほんのちょっとだろ？」

「うーん...いや、ダメ。ゴメン」

「なんで.....」

何でそこまで拒むのか。何か理由があるのなら言って欲しい。仮にも朝矢は、和臣と付き合っているのだから.....

そんな事を考えて和臣を見ていたら、額をピンと弾かれた。

「そんな物欲しそうな目で見んなよ。困るだろ」

ガシャ、と自転車のロックを外して跨がると、後ろに乗るように促してくる。和臣の背中に頬を寄せると、片思いしていた頃の苦い気持ちがふと甦って来た。

『困るだろ』

言い方は軽かったけど、今の朝矢には重くのしかかってくる言葉。

(俺の気持ちって、オミには負担になってるのかな...)

大好きなラーメンの味も、今日はよく分からなかった。

第4章（3）

期末試験最終日。

明日から秋休みに入るという事もあって、最後の科目が終わると学内は開放感に溢れた。

「あー終わったー！俺は赤なさそうだけど、トモは？」

「うん、俺もさすがに赤はないと思う」

「よっし、じゃあ思う存分後夜祭の準備ができるな」

屋上庭園行こうぜ、と促して歩き出そうとする和臣の腕を朝矢は引き留めた。振り向いた和臣と目が合う。

「どうした？まだ支度できてない？」

『困るだろ』

「...あ、いや、その...」

駐輪場での事がフラッシュバックして、朝矢は和臣の腕をつかんだまま視線を落とした。

「今日は...やめとく。昨日あんまり寝てねーから...」

とっさについた嘘。拒絶されるのを避ける為に、自分から和臣の誘いを断った。本当は一緒にいたいけれど。どんどん膨らんで行く朝矢の気持ちを和臣がどこまで受け入れてくれるのか分からないから。自信がないから。それを知るのが、怖いから。

「そっか。じゃ、帰...」

「よお、おつかれー」

和臣が言いかけた所に俊介が割り込んで来る。そして朝矢の手を和臣の腕から外させると、肩をぐっと抱き寄せてきた。目の端に、一瞬強張った和臣の顔が映った気がした。

「なあ、試験終わったんだしどっか寄らねー？」

俊介は和臣には構わずに、さらに朝矢に顔を寄せて来た。まるで和臣に見せつけるかのように。変な誤解をされたくなくて、朝矢は肘で突ついて俊介の腕から抜け出す。

「...お前もどう？」

そう言って上目遣いに和臣を見た俊介は、ひどく挑発的な表情をしていた。一方の和臣は、明らかに気分を害したのが見て取れる。朝矢にはそんな顔を見せる事はないから、正直言って怖かった。

小さく笑みさえ浮かべている俊介と、口を堅く結んだままの和臣。睨み合いとも言える状態がしばらく続いた後、

「...俺はいい」

和臣はそう言って踵を返した。

「あっ、オミ...！」

咄嗟に追い掛けようとしたものの、どう声をかけていいか分からず、結局和臣の数歩後ろをついて歩く羽目になった。その朝矢のさらに後ろから、俊介が脳天気について来る。

靴を履き替えた後、和臣は何も言わずに駐輪場に向かってしまった。

「あーあ、君のカレシは心が狭いねえ...いてッ」

朝矢は苛立ち任せに俊介の向こう脛を蹴りあげる。足を引き摺りながらついて来る俊介を振り返り、

「お前のせいだっ！今日は奢ってもらうからな！」

これまた苛立ち任せに言い放った。

ストレス発散にちょうどいいかと思って入ったカラオケボックスだったけれど、楽しく歌う気分ではなかった。

「お前さ、また何か悩んでんだろ。言ってみ？」

俊介は歌本のページを適当にめくるだけの朝矢からコーラを横取りして一口飲むと、ついでに歌本も取り上げて向こうに置いてしまう。

「別に悩んでなんか…」

「嘘つけ。顔にはっきり『コイワズライ』って書いてあるっての」

言い当てられて、ぐっと唇を噛んで俯く。外からほとんど見えない個室の中という油断もあって、じわりと涙が浮かんできた。

「ああほら、泣くなって。…どうしたんだよ？」

くしゃくしゃになったハンカチを差し出す俊介の不器用な気遣いに、朝矢が片思いしていた頃と同じように、悩んでいるのを知って誘ってくれたのだと気付く。そうして促されるままに、話せるだけの事を話した。

「なるほどねえ…」

腕組みをしてぼんやり宙を見上げた俊介は、ふと真顔で朝矢に向き直った。

「あのな。お前にはどう見えてんのかわかんねーけど、あいつお前にベタ惚れだぞ？」

「え？じゃあ何で…部屋入れてくれなかったりとか…」

朝矢の頭上にいっぱい浮かんだ疑問符を見抜いたようにフフンと笑うと、俊介は肩を竦めて首を振った。

「ベタ惚れだからだよ。朝矢はお子さまだからわかんねーかなあ」

「何だよお子さまって…」

唇を尖らせた朝矢の背中をぽんと叩いて、俊介はもう一度真顔に戻る。

「いいか。明日、とにかく早起きしてあいつん家に行け。場所分かるだろ？」

「え、そんな事したらオミが怒…」

「絶対、怒らねーから。とにかく行って来い」

きっぱりと断言されて、言い返せなくなってしまう。

朝矢が黙っている間に1曲入れた俊は、前奏の間に振り返って付け加えた。

「あと、あいつん家行くなら持ってた方がいい物がいっこあるんだけど…」

「何？」

「…ま、多分あいつが持ってるな」

俊介は一人で納得したように頷くと、そのまま歌い始めた。

第4章（4）

「いいな、明日絶対あいつん家行ってこいよ」

別れ際に念を押されて帰路についた電車の中、俊介に言われた事を少しずつ思い出す。

「今の状況に不満があるんだったら、お前から行って来い」

（行って、何か変わるのかな）

「じゃあお前、逆の立場で考えてみるよ。あいつが家に遊びに来たら嬉しいだろ？」

（そりゃあ、俺はオミの事好きなんだしさ...でも俺は来ちゃダメだって言われたし）

「お前にベタ惚れだよ、あいつ」

（だったら何で俺はこんなに悩んでんのかな...）

携帯を開いて和臣と撮った写真を探す。朝矢がこの携帯を買った時にすぐ撮ったものだ。小さい画面に入るように寄せ合った頬。照れたような嬉しそうな朝矢の顔。和臣にも内緒で大事に取ってある一枚。

和臣の言った事が本当なら、この頃はもう和臣も朝矢の事が好きだったということになる。

（わかんねーや...）

パチンと携帯を閉じて、暮れ行く外の景色に目を移した。

翌朝、ラッシュアワーを少し過ぎた時間に朝矢は再び電車に乗っていた。

夜中に何度も目が覚めて熟睡できず、そのうち家族が起きだして来たようなので、朝矢もついでに早起きしてみた。あまり遅くなると、先に和臣がこっちに向かって来てしまう。

メールでも入れようかと思ったけれど、来なくていいと返されそうで出来なかった。

（勝手に行ったりしたら、怒るかな...）

もし玄関まで行って、追い返されたらどうしよう。

まさかとは思うけれど、他の.....女の子がいたりしたら。

急に怖くなって、ぎゅっと締め付けられるように痛む胸を押さえた。深呼吸して何とか気持ちを落ち着ける。

大丈夫...大丈夫。俊介は心配するなと言っていた。今までだってたくさん悩んだけれど、和臣は朝矢の事が好きだと言ってくれた。大丈夫。

開いたドアからホームに降り立ち、両手で軽く自分の頬を叩いた。

地図を片手に和臣のアパートを目指す。あの時は学校から自転車で連れて来られて、帰る時にアパートから駅まで送ってもらっただけだから、駅から向かうのは初めてだ。道々で目にした景色の記憶を頼りに、朝日がまぶしい住宅街を進んだ。

（あった、ここだ...）

塀の前に自販機がある、2階建てのアパート。すぐ側に和臣がいるのだと思うと、緊張して足がすくんだ。なかなか前に踏み出せない。静かな住宅街で自分の胸の高鳴りだけが響いているように思えた。

その時。

「.....っ！」

ポケットの中の携帯が鳴り、全身がびくっと震える。慌てて着信音を止めて確認すると、和臣からのメールだった。

『おはよう。起きてる？』

いつもの休日と変わらないモーニングコール。このままここでじっとしていても、そのうち和臣が出て来てしまう。朝矢

は手短に「起きてるよ」と一言返すと、意を決してアパートの外階段を上った。

ドアの前でもう一度深呼吸をして、インターホンを鳴らす。すぐに中から和臣の返事が聞こえて、数秒後にドアが開いた。

「トモ...？」

「...おはよ」

パジャマ代わりのジャージ姿で、ぼさぼさの髪をピンで止めた和臣。普段見た事のないあまりに無防備な和臣に一瞬目を見開いてしまったけど、当の和臣は朝矢以上に驚いていた。

「え、さっきメール...なんで...」

「もう、近くにいたから」

そっか...と呟いたきりドアを開けた姿勢のまま黙ってしまう和臣を見て、さっきまでの不安が甦って押し寄せて来る。思わず、隙間から見える玄関に和臣以外の靴がないかと探してしまった。そんな嫉妬深い自分を和臣がどう思うかと考えると、余計自己嫌悪に陥った。

「あのっ...ごめん、急に来たりして、何か早く起きちゃったから...、ほんとごめん、俺その辺で時間潰してるから、」しどろもどろで言い訳にもなっていない。とにかく逃げるようにその場を立ち去ろうとした朝矢を、和臣は腕を掴んで呼び止めた。

「せっかく来たのに、何で戻るの。時間潰すって、どこで」

「だって、迷惑...わっ」

ぐいっと引っ張られて玄関に入れられ、後ろでドアを閉められる。和臣が朝矢の腕を掴んだままどんどん部屋に入っていくので、朝矢は慌てて靴を脱いでついて行く羽目になった。

「顔洗って来るから、適当に座ってて」

そう言って洗面所に向かう和臣の後ろ姿に、怒っている様子は感じられなかった。ベッドに腰掛けて、ごろりと横になる。ついさっきまで和臣が寝ていたであろう布団はまだ温かい気がして、心地よさに任せて目を閉じた。そういえば、緊張してあまり寝ていないんだっけ...

「トモ、眠いなら少し寝てる？俺コンビニ行って朝飯買って来るから」

うとうとしている所に和臣が戻って来て、ベッド脇に屈んで朝矢を覗き込んだ。朝矢の好きな、優しい和臣。髪や頬を撫でられ、こういう事に不馴れな朝矢は胸の奥がくすぐったくなった。

「何でそんなに優しくすんだよ...いきなり来て迷惑じゃないのか？」

「迷惑な訳ないだろ？そりゃ、ちょっと驚いたけど」

「じゃ、何で俺が行きたいって言った時はダメだって言ったんだよ」

部屋が散らかってるとか言ってたけど、そんな事は全くなかった。朝矢が投げかけた疑問に、和臣は手を止めて少し困った顔をした。

「別に来てほしくなかった訳じゃないんだよ。何て説明したらいいかなあ...」

和臣は朝矢を見下ろして微笑うと、ふっと顔を近づけて来た。

第4章（5）

（うわ……）

こめかみの辺りでちゅっと音がした。キスされたのだと気付いて体温が一気に跳ね上がる。

（わ、ど、どうしよう…）

耳元にも額にも頬にも、数え切れない程降って来るキスの雨。朝矢は目をぎゅっと閉じて身を固くした。握りしめた拳に汗が滲んで来るのが分かる。こんな時はどうしたらいいんだろう。仮にも恋人にキスされているという状況なのだから、抱きつくとか手を握るとかした方が……

「…くくっ…」

「？」

押し殺したような笑い声が聞こえて薄く目を開けると、和臣が俯いて肩を震わせていた。

「な、何…」

「トモ、緊張しすぎ。そういうのも可愛いけど」

「なっ……」

かあっと、顔はおろか耳まで染まった気がした。そんな朝矢をなおも笑い続ける和臣を見て、悔しさに似たようなやるせなさが込み上げて来る。

「しょうがないだろっ！ どうせ俺はこういうの慣れてないし、何もそんな風に…っ…」

次の瞬間、朝矢の目の前は真っ暗になった。

確かにここにいるのに、和臣の姿が見えない。

声を出そうにも唇は塞がれている。

和臣の唇が、朝矢のそれにぴったりと重なっていた。

「んっ…オミ、ん…」

一旦離れたと思うとまたすぐに重なり、朝矢の言葉はキスに吸い取られた。

和臣は角度を変えながら朝矢の唇を啄み続ける。何度も、何度も。軽く噛むようにされた下唇が痺れて、でもひどく甘くて溶けてしまいそうだった。

心地よさにふわふわと漂う感覚にとられる。

「…口、開けて」

「え…？」

意味が分からなくて聞き返した唇の隙間から、和臣の舌が侵入りこんで来た。慌てて口を閉じようとしたけれど、それでは和臣の舌を噛んでしまう。どうしたらいいのか分からず、突然の事に驚いて息の仕方さえ分からずに、苦しくなった朝矢は和臣の胸を力なく叩いた。

「……っ、は…」

「ごめん、嫌だった？」

荒い息を吐く朝矢を心配そうに覗き込んで和臣が声をかける。息苦しさに浮かんだ涙を払うように、朝矢は首を横に振った。

「嫌じゃないよ…その、ちょっとびっくりして…」

何をされても心臓が破裂しそうな程どきどきしてしまう朝矢に対して、朝矢を気遣う余裕すらある和臣。やっぱり悔し

くて、別の涙が滲んで来る。

「俺、オミの事すげー好きだもん…。だから、何されても嫌じゃねーけど、でもっ…」

今の気持ちをうまく伝える言葉が見つからずに声を詰まらせた。頬に触れられて目を上げると、分かったと言うように和臣が頷く。

「ゆっくり、息して。大丈夫だから」

「うん…」

朝矢が目を閉じるのと同時に、再び唇が重なった。舌先で突つくように促されておずおずと口を開く。さっきよりもゆっくり、様子を伺うように差し入れられた舌を受け入れた。慣れない感触にびくりと引っ込めた朝矢の舌を、和臣は追い掛けて絡め取る。

「ん…んう…っふ…」

キスだってまともにした事がない朝矢は、もちろんこんなのは初めてで。必死に息をしながら、背筋をぞくぞくと駆け上がって来る感覚に耐えるのに精一杯だった。

「んんっ…はぁ…」

長い長いキスの後、和臣は朝矢をぎゅうっと抱き締めてベッドに身を沈めた。

「トモ…俺、トモの事全部知りたい。俺の事も全部知ってもらいたい…」

ため息混じりの呟きが示す意味に、朝矢の胸はまた高鳴り始める。和臣は身体を起こしてまっすぐに朝矢を見下ろし、はっきりと言った。

「俺、トモの事本気だから。トモとは全部したい」

「オミ……」

嬉しさと戸惑いがごちゃ混ぜになって、とてもすぐには返事が出来なかった。

「…本当はもっと時間かけて付き合ってから言うつもりだったんだけど…」

和臣が罰が悪そうに視線を逸らしてもう一度ため息をつく。

「トモと二人になれる時間、俺だってもっと欲しかったよ。でも二人っきりになったら、早まって何するか自分でも分からなかったし…。そんな事して、トモを傷つけたら…」

「オミ…っ」

たまらずに抱き着いた朝矢を、和臣はしっかりと抱きとめてくれた。背中を撫でながら、なおも優しく話し続ける。

「トモが嫌がる事はしたくないから…トモが望まないんだったら、このままでも構わない。好きならしなきゃいけないって事じゃないから」

「バカっ…さっき俺が嫌じゃないって言ったの聞いてなかったのかよっ…」

朝矢は力いっぱい和臣の背中を抱き返して、不器用ながらも自分の気持ちを伝えようとした。どきどきして震える声を必死に絞り出す。

「今すぐって訳にはいかないけど、俺が決心ついたら言うから。だから…」

「分かった。待ってる…」

和臣は朝矢の首筋にキスをひとつ落として、嬉しそうに微笑んだ。

第5章（1）

それから秋休み中は毎日、朝矢が和臣のアパートに通った。

朝矢が来るのをあんなに拒んでいたのが嘘のように歓迎してくれるし、最終日になる頃には合鍵までくれた。

そして、一旦触れるとなかなか朝矢を離さない。朝矢がGOサインを出すまでキスから先はおあずけ、という事になっているので、じれったそうにはしているけれど。

（それにしても...オミってこういうタイプだったっけ？）

部屋にいる間はそれこそトイレと食事以外はずっとくっついていっているような状態だった。キスだって一日に何十回しているか（されているか）分からない。愛されてるんだと思えば悪い気はしないし、今までの時間を埋めるにはまだまだ足りないくらいで。

でも。

「ん...っ」

唇が離れた後の、和臣の何か言いたげな表情。何が言いたいのかは分かってる。

（何か大変な約束しちゃったんだなあ、俺...）

朝矢から言わないと、関係は進展しない。つまり、朝矢が誘ってセックスする事になる訳で...

（そんな事できる訳ないじゃんか）

そりゃ、したいけど。初めてだし男同士とか色々不安はあるけれど、和臣なら優しくしてくれそうだから。少なくとも夢で見た時はそうだった。優しく、気持ち良くて.....

和臣は妙に律儀な所があるから、一度決まってしまった以上は無理に誘って来る事はないだろう。でもいっそ押し倒してくれた方が、よほどスムーズに事が運ぶ気がする。

見上げて目が合うと、またちゅっと唇をさらわれた。

「よお、久しぶりー。有意義な秋休みだったかい」

休み明け、揃って登校した朝矢達を見つけて俊介が歩み寄ってきた。ムツとする和臣には構わず、朝矢をぐいぐいとバルコニーに引っ張って行く。

「で、どうだった？上手く行っただろ？」

「ああ...うん、お陰さまで」

秋休みの初日に強引にでも和臣の部屋に行けと言ったのは俊介だった。その通り行ってみて、確かに進展はあったのだから感謝すべきだろう。

「そういや俊、あいつんち行く時に必要な物って何だったんだよ？」

カラオケで俊が言いかけた事。和臣が持つてるだろうからとも言ってたっけ。

「え？ゴムだよゴム。使わなかったの？」

「ばっ...し、してねえよっ、そもそもっ」

俊介の言う「使わなかった」が「生でした」という意味を含んでいるのを感じて、朝矢は慌てて否定する。

「嘘だろ？してない？一週間も休みあって？」

「うるさいなっ、みんながみんなお前みたいに手え早くねんだよっ」

呆れた口調と話している内容にかっとなって、朝矢は思わず声を荒げた。第一、ここは学校のバルコニーなのだ。こんな話、他の生徒に聞かれでもしたら。

「あーあ、ひどい言われようだなあ、俺」

俊介の苦笑を背に、ふんと踵を返して教室に戻った。

冗談じゃない。和臣はそんなに軽いやつではないのだ。現に、朝矢がいいと言うまで待ってくれると言っているし。でも

...

和臣が持っているという事は、和臣には経験があるという事だろうか？でも、香織とはしてないと言っていた。じゃあその前は？余裕があるのは慣れてるから？

「眉間にシワ」

席に着いてからもふくれ面をしていた朝矢の額を和臣が突つく。

「まーた奈良に何か言われたのか？」

「別に...」

何を話していたかなんて言える訳がない。視線を落とすとちょうどシャツのボタンを開けた和臣の胸元が目に入って、妙に意識してしまう自分が恥ずかしかった。

予鈴が鳴って、和臣は朝矢の頭を軽く撫でると自分の席に戻って行った。

おかしい。

絶対おかしい。

今までもずっと触れあう度にどきどきはしたけれど、秋休み以降明らかに悪化(?)している。

和臣には何か思う所があったようで、休みが明けてから積極的にスキンシップを計って来るようになった。学校の自転車置き場とか廊下とか屋上庭園の柱の影なんかで人目を盗んでキスしようとしたりというのはスキンシップの域を超えているんじゃないかと思う。

まず恥ずかしいのもあるけれど、触られると本当に自然発火でもしそうに熱くなって...

あまり変な態度を取ると周囲に何か勘付かれそうなので出来るだけ平然と振舞っているつもりだけど、それが余計に朝矢を消耗させていた。

第5章（2）

「...あ、ごめん。間違えた」

そんなこんなで、文化祭に向けて続けていたダンスの練習もここ最近は特に身が入らない。

「疲れた？少し休もうか」

「うん...ごめん」

タオルで顔を覆って、深いため息と共に座り込む。和臣は朝矢の隣に少し距離を置いて腰を下ろした。朝矢は汗を拭きながら顔を伏せていたけれど、じっと見られている気がして落ち着かない。人目を気にしなくて済む場所ならここまで神経質にならなくてもいいんだろうけど、ここは屋上庭園。北館からも南館からもまる見えの、学校のだ真ん中だ。

「トモさ、もしかして俺が言った事気にしてる？」

びたり。

不意に和臣が口にした言葉に、あからさまに固まってしまった。

やっぱりな、という小さな呟きが聞こえて、少し慌ててしまう。

「や、別に、気にしてるっていうか、いや気にしてないし...」

ダメだ、と思った。自分でも笑えるくらいもっている。

「トモがしたくないならしなくていいって言ったろ。だからそんなに...」

「気にしてないって言ってんだろ！」

ため息まじりに言う和臣に少しむっと来て、つい声を荒げてしまった。

本当は、気にしている。

それは和臣が思っているような事じゃなくて。

するかしないかを迷っているんじゃない。

早く和臣の気持ちに伝えたいと思う。好きな人と抱き合いたいのは朝矢も同じだから。

でも、怖い。やっぱり怖いのだ。

和臣がどんなに優しくしてくれても、痛みはあるだろう。

和臣のためなら耐えられると思うけれど。

自分がどうなってしまうかわからない。どんなみっともない姿を和臣に見せてしまうか。

それを見た和臣が、朝矢から離れて行かないか.....

自信がないのだ。

こんな気持ちは和臣には分からないだろうか...

「お...俺が決心つくまで待つって言ったじゃんか...、すぐやらないとしたくないって事になんのかよっ...」

口をついて出るのは、無理に強がって憎たらしい事ばかりで。

和臣が辛抱強く待ってくれているのも、朝矢を気遣って「しなくてもいい」って言ってくれているのも分かっている。なのに自分は どうして素直になれないんだろう...

「帰ろう。オミン家行く。で、すぐやる」

「何だよそれ、何言ってん...」

「いいから！早く！」

もう、半ばヤケだった。

和臣の手を引っ張って先を歩き、自転車の後ろに跨がる。

二人乗りで帰るのはいつもの事だから、和臣は何か言いたげな顔をしながらそのまま出発する。そしてお互い無言のまま、しばらく進むと突然止まった。

「何...？」

足をついて顔を上げると、何故止まったのかすぐに分かった。

和臣のアパートに行くにはこの路地に入る。

まっすぐ行けば、駅に着く。

このまま帰るか、アパートに行くかの分かれ道だった。

和臣が顔だけ振り返って、目で聞いてくる。どうする？と。朝矢はかっとなって、和臣の背中にしがみついた。

「帰らないからなっ……」

そう言って。

自分でも、何で急にこんな行動に出てしまったのかと思う。焦りだけが大きく膨らんで、朝矢を支配していた。まだ、自信が持てずにいたのだ。好きだと言っただけの関係では、終わりが見えているんじゃないかと。せつかく求められているんだから、身体の繋がりを持った方が和臣にとっての朝矢の存在意義が大きくなるんじゃないかと。浅ましくて情けなくなる。

自転車は再び動き出し、細い路地へと入って行った。

第5章（3）

部屋に入ると、朝矢はすぐに和臣に飛びついて唇を重ねた。

飛びついた勢いに和臣が後退して、ぶつかったベッドに腰かける姿勢になる。朝矢はその上に跨がって、必死になって和臣の唇を吸った。両手は和臣のシャツの襟を引っ張るくらいに握り締めて、キスしていなければまるで掴みかかってケンカでもしているみたいだった。

「……っ、トモ、トモ！」

「うるさいなっ……！」

肩を掴まれ力で引き剥がされて、朝矢はその反動で和臣をベッドに押し倒した。困惑した和臣の表情が目の前に見え、いたたまれない気持ちになる。

…こんなの、全然違うのに。

朝矢は振り払うように頭を振って、和臣のシャツのボタンを外しにかかった。けれど手が震えて、思うように進まない。焦れたくて、引きちぎってしまおうかとも思った、その時。

「……！」

和臣の手が頬に触れて、朝矢はびくりと手を止めた。

冷たかった、和臣の手。いや、違う。自分の頬のあまりの熱さに驚いたのだ。

和臣は何度か朝矢の頬を撫でると、シャツを掴んでいた手をやんわりと退けさせ、朝矢に押さえ付けられていた上半身を起こす。そして宥めるようにゆっくりと、朝矢の耳元に息を吹き込んだ。

「落ち着いて、トモ。どうしたんだよ…？」

「う……っ…」

和臣の声が薬みたいにしみ込んで、強張った身体のが抜けていく。また名前を呼ばれて顔を上げると、窺うような視線にとらえられた。その奥——瞳の中に、朝矢が映っている。ああ、まただ。また、どうしたらいいのか分からないという顔をしている。

そんな朝矢を映し続けるその目がずっと細められ、朝矢は和臣の腕の中に収まった。シャツ越しに触れる身体が熱く感じられるのは朝矢自身の体温なのか、それとも……

「噛まれるかと思った、さっき」

朝矢の肩口に顔を埋めて和臣が呟く。自分でも嫌になる程の強引さが思い起こされて、罪悪感が押し寄せて来た。謝らなければ、自分の気持ちを説明しなければ。

「…でも初めてだよな、トモからキスしてくれるのって」

「……！」

顔は見えないけれど、和臣が少し笑った気がした。朝矢を抱く腕に、一瞬だけぎゅっと力がこもる。

「焦らなくていいんだからな」

そう言うと和臣は身体を離して、自分で残りのボタンを外した。見せつけるように、脱げるぎりぎりまではだけさせる。それがひどく艶っぽく見えて。

どうする？

そう言われて、朝矢はこくりと息を呑んだ。

これは、誘われているのだろうか？

朝矢は目の前の和臣の胸にべたりと手を置いた。筋肉に沿ってその胸板をそろそろと撫でてみる。

一緒に海に行った事もあるし、体育の着替えとか、和臣の身体を見る機会は今までいくらでもあった。でも、当たり前だがこんな目的で見る事なんかなかったから——均整の取れた…とでも言うのだろうか、こう言うのも何だけど、美しい。

「——何？」

「えっ、あっ、別に……」

上から微笑を含んだ和臣の声が降って来て、そんな必要はないのに慌ててしまう。

「その、ごめん、べたべた触ったりして」

「いいよ。何一つか...気持ちいい。変な意味じゃなくてさ」

和臣は柔らかく笑って朝矢の後頭部を包むように髪を撫でた。こんな感じ...分かる？と言いながら、手は耳へ、首筋へ、頬へ、何度も移動を繰り返す。気持ちいいというより「心地良い」に近い感覚。

不思議だ。和臣に触れられてあんなに胸が高鳴る事もあって、こんなに安らぐ事もあって。

いつの間にか和臣に身体を預ける格好になって、大きな手が朝矢の背中を……

「ちょっ、ちょっと！」

思わず身を振って自分の目で確認してしまった。和臣の手が...シャツの中から素肌に触れているから。慣れない感触に鳥肌が立つ。和臣はすぐに気付いてぱっと手を離れた。

「気持ち悪い？背中触られるの苦手？」

「いや、そうじゃなくて……」

なんで、手が、中に。

切れ切れにそう問うと、和臣は逆に疑問符を浮かべたような顔をした。

「何でって...元はと言えばトモから誘ってくれたように思えるんだけど」

違った？と聞かれて、少し考えてから首を振った。ここで止めてしまったら、なけなしの勇気が無駄になってしまう。きっかけは作れた。あとは……

「嫌だったらちゃんと言うから...オミの好きなようにしていい」

朝矢は和臣の首に腕を回して唇を寄せた。

「了解」

近過ぎてよく見えなかったけど、唇が触れあう直前、和臣の口角が上がった気がした。

第5章（4）

お互いの出方を窺うように軽く何度も合わせて、どちらからともなく差し出した舌はあっという間に絡み合う。まるで我慢比べでもしているように、じっくりと長いキスを味わって行く。

「ん...んうっ...」

その我慢比べは簡単に朝矢の方が負けてきて、無意識に引いた顎は和臣に引き戻されて。襟元にかかった手が朝矢のシャツのボタンを外していくのが目の端に映った。

「ふ...オミ...っあ...！」

唇が離れて大きく息を吸い込んだのも束の間、首筋に這うぬるりとした感触に身を竦める。頸動脈をなぞるように這わされて、全身の動脈がどくどくと脈打つようだった。

「あ...あっ.....」

和臣の唇が下へ下へと移動するのに合わせて、ボタンを外されたシャツも脱がされて行く。和臣にしがみついた両腕にひっかかるだけになったそれをそのままに、身体を反転させられてシートに横たえられた。

和臣は自分のシャツを脱いで床に放ると、朝矢に覆いかぶさって来た。もう一度唇に軽くキスを落として、首筋に吸い付いて来る。徐々に乱れる朝矢の息遣いと繰り返されるキスの音が必要以上に大きく聞こえて、余計に朝矢を昂らせた。

「は...あ、はっ、は...」

「感じる.....？」

ぎゅうっと握りしめた朝矢の手を上から優しく握って、和臣は一旦身体を起こした。多分朝矢の顔を覗き込んで...よく見えなくて、朝矢は自分が涙を浮かべている事を知った。

痛い訳でも悲しい訳でもないのに、視界がにじむほどに浮かんだ涙。和臣に触れられる所全部が熱くて、頭がぼうっとして、これが「感じる」という事なのだろうか。

「イイ顔...すごい、色っばい」

「うあっ.....」

胸元に降りて来た突然の刺激に思わず跳ねる。小さな突起が和臣の舌に包まれて、男の身でそんな所を他人に愛撫されるなんて思った事もなかった朝矢はその刺激をどうやり過ごせばいいのか分からなかった。

「あ、あ、オミ、だめっ.....」

「だめ？イヤ？」

「...じゃない、けどっ...ん、あっ」

和臣がそこを舌で突ついたり吸ったりする度、覚えのある感覚が沸き上がって来ていた。下腹部が疼くような、血液が集まって行く感覚。これ以上されたら、和臣にも分かるほど反応してしまう。何とか膝を立てて和臣の下から身体をずらそうとすると、逆に両脚の間にしっかりと身体を割り込まれてしまった。

「う...あ...あっ...」

形を変えた朝矢のものが和臣の鳩尾の辺りに触れる。恥ずかしくてたまらないのに、布越しに擦れる感覚に背筋が粟立って、それはまるで自分の意志に反して熱を溜め込んでいった。

「っあ...！ちょ、っと...！」

脇腹を撫でられてびくりとした次の瞬間に聞こえた音に思わず我に返る。肌を這っていた和臣の手が、朝矢のズボンのベルトを外しにかかっていた。

「待って、待って...！」

慌てて和臣の手を押さえて止める。重なった手のすぐ下に朝矢自身が布地を押し上げている様が見えて、今度は羞恥に耐

えきれずに涙が浮かんだ。和臣が伸び上がって、キスでその涙を拭う。

「俺言ったよね、トモの事全部知りたいて」

「でも、こんな……っ」

みっともない朝矢。醜い部分を見られる事にはさすがに抵抗があった。

「俺はトモが心配してるような事、何も思っていないから。大丈夫だから」

心の中を見透かしたように語りかけられても、戸惑いを拭い去る事ができない。

「あともう一つ…俺の事も全部知ってもらいたいて言ったよね」

「……っ！」

身体を密着させられて息を呑んだ。朝矢だけじゃない、和臣のも、熱くて……

「分かる？」

「ん…っ、んふ…ふぁっ……」

与えられた口付けは今まで知らなかった、呼吸と一緒に欲情が流れ込んでくるような濃厚なもので。身じろぐ度に更に熱くなるような感覚に、言いようのない興奮を覚える。唇から少し遅れて離れた舌先は糸を引くほど濡れていた。

「もう止まらない。だから、お願い」

その言葉とともに、頭をもたげた朝矢自身が露にされ、外気に触れて小さく震えた。

第5章（5）

「あれ？幸田早いじゃん」

「うん、ちょっとね」

朝練中の運動部員に声をかけられながら、朝矢は一人、廊下を急いだ。

『やる事があるから先に行く』

和臣にはそうメールして、今朝は一人で登校した。もちろん、見え透いた嘘なのだが。

きっと和臣にも嘘だと分かっている。でも、どんな顔して会ったらいいか、いつもみたいに自転車の後ろに乗って和臣の背中にくっつくなんて...

和臣だって戸惑うはずだ。

暇を持て余してバルコニーからぼんやり外を眺めているうち、他の生徒達が次々に登校して来る時間になった。無意識に自転車登校の生徒に目が行ってしまう自分にため息が出る。

「よお、今日は一人なんだな。あいつ休み？」

俊介がずるりと朝矢の横に滑り込んで来て、同じように外に目を向ける。こいつが来たという事は、和臣もそろそろ着く頃か...やはりそんな風に思ってしまう自分に、軽く舌打ちした。

「別に、早く起きたから先に来ただけ」

「何だよ、だからって一緒に来りゃいいじゃん。喧嘩でもしたか？」

「してねーよ」

「あっそ。でも、何もなくて顔じゃねーんだよなあ...」

「な、何だよ.....」

じろじろと朝矢を見る俊介に身構えて、朝矢は小さく一步下がった。俊介は変にカンのいい所があるから、今までも朝矢が和臣の事で悩んでいたりとすぐに見抜いて指摘して来た。それはそれで助かってたけど、今回ばかりは俊介にどうにかできる問題じゃない。

「どうせまたあいつの...ん？お？ちょっと朝矢君？」

「あ...っ」

シャツの襟を引っ張られて、とっさに押さえる。何を見られたのか、俊介の表情からすぐに分かった。

「は一ん...なるほどね。お前らついに...」

「しっ、してねえよっ！その...最後までは...」

反論しながら少し思い出してしまい、ごまかすように語尾が小さくなった。

昨日、あの後――

「触っていい？」

恥ずかしくて真っ赤になった朝矢の頬にキスをしながら、和臣は勃ち上がった朝矢の中心に指を絡めた。

掌に包み込んで、ゆっくり、ゆっくり上下に擦られる。

「あ...あ...っ...」

朝矢は目をきつく閉じて、和臣の肩にしがみついて与えられる快樂に身を震わせた。

時折耳にかかる和臣の吐息の熱さにも、敏感すぎるほどに感じてしまった。

「痛くない？気持ちいい...？」

朝矢を気遣ってあまり強く擦らないのが逆にもどかしくて、でも自分からねだるなんてとても出来なくて、縋るように和臣の首に腕を回す。

「すごい濡れてるよ...」

「あうんッ...！は...」

先端に塗り広げるようにされて、一瞬達してしまったかと思う程感じて身体が跳ねた。すっかり感じ切っているのに気付いたのか、和臣の手の動きが少しずつ速まって行く。

「あっ...あ...ん...んあ、ああ...っ...」

「やば...トモの声聞いているだけで、イケそ...」

それはむしろこっちの台詞だった。色を含んだ低い声を耳元に吹き込まれて、溢れた先走りがさらに和臣の手を濡らしてしまう。首筋に吸い付かれ、ぞくぞくと駆け上がる絶頂感に限界に近い事を感じた。

「あっあっ、あ、オミ、あ...っああ.....！」

自分でするのはと比べものにならない快感の余韻から逃げられないまま、ぐったりと身体を投げ出した。

ぬるっ...という感触と共に、和臣の手が朝矢自身から離れる。

荒い息と身体の震えがいつまでも収まらずにいる朝矢に、和臣は再び手を触れてきた。

「...オミ...？」

両膝を揃えて持ち上げられ、脚の付け根辺りに何かが押し付けられる。熱を帯びたそれはそのまま、朝矢の太股の間に挟むように差し入れられた。

「な、何.....あ...！」

抜き差しするように動き始めたそれが和臣の昂りだと分かった途端、また朝矢の先端から溢れ出す感覚があった。和臣が腰を打ち付ける度に、どんどん溢れては伝い落ちる。

「あ...っあ...っあ...はあっ...」

どこを触られている訳でもないのに、抑え切れずに喘いでいる自分が信じられなかった。和臣が朝矢の身体を使って自慰をしている...それだけでたまらなく興奮して、熱い塊を擦り付けられる太股から腰あたりまで甘い疼きと痺れが広がって行く。

「っん.....」

眉を寄せる和臣の表情はひどく淫らで、イク時はどんな顔をするんだろう...そんな事をふと思った。でも、すぐに何も考えられなくなって。

第5章（6）

「あ...ああ...やあっ...」

「トモ...感じてるの...?」

「んっ、ん...」

素直に頷くと、脚の間で和臣が質量を増したような気がした。持ち上げていた脚を下ろして、ぴったりと身体をつけるように抱き締められる。そのまま腰を揺すられると、お互いのものが直接擦れ合ってたまらない快感を生んだ。

「や...あ、やだ...っああ...!」

「すげ...気持ちいい...」

和臣が絶頂に向けて更に激しく腰を動かすと、それが朝矢への刺激にもなった。汗で滑る和臣の背中に腕を回して必死にしがみつく。

「トモ.....っイキそ...」

その言葉に、朝矢の下肢がびくびくと反応を示した。

「トモ...」

「あ...はあっ、は...ん、ん...う...んんんっ.....」

唇を塞がれて、絡んだ舌を強く吸い上げられた時、朝矢の意識は真っ白に弾けていた。

意識が飛んでいた時間はそう長くなかったと思う。

まだ和臣が朝矢を抱いたまま荒い息をついていて、朝矢が身じろいだのに気が付いて身体を起こす。

「ごめん、重い?」

「ううん...、あ...!」

朝矢も起き上がろうとして、目に入ったものにひどく動揺した。精を吐き出した証拠と言わんばかりにべっとりと濡れた下腹部。慌てて、視線を避けるように和臣に背を向ける。後始末をしながら、身体の震えをとめる事ができなかった。今した事で、和臣との関係は間違いなく一線を越えてしまった。

その事が嫌なんじゃない。あんな風に乱れて、溺れて、自分にあれ程までにさもしい本性が眠っていたのかと思うと、それを和臣に曝け出してしまった事が怖くてしょうがなかった。

震える手で身なりを整えようとしても、シャツのボタンが上手く留められない。見兼ねた和臣が丁寧にしてくれたけど、その間にも何度も唇を啄まれて、また変な気が起きそうになった朝矢は「駅まで送る」と言うのも聞かずに逃げるように帰って来てしまった。

首の付け根、鎖骨の近くに控えめなキスマークが残されていたのを知ったのは、だいぶ時間が経ってからだった。

「で、お前、そういうコトされて嫌だったからあいつを避けたワケ?」

俊介に跡を指差されながら聞かれて、朝矢は首を横に振った。

「ならいいんじゃないの?何も悪い事ないだろ」

「お前カンタンに言うけどなあ...」

分かってるんだろうか。朝矢も和臣も男で、もう2年も友達としてやってきて、その関係が変化するという事の重大さを。俊介が言うと本当に何でもない事のように聞こえるけれど。

「じゃあ、あいつはカンタンに言ったんだと思うか?元々男が好きなんじゃないやつが、お前を抱きたいとかカンタンに言えるワケねーだろ」

それを言われて、ふと我に返った。和臣はそんな事を軽々しく口にするタイプじゃない。昨日だって、結局最後までしなかった。朝矢が怖がっていると思って？

「あいつだってそれなりに悩んだりすんじゃないの」

お前だけが恋煩いしてる訳じゃないんだぜ？もうちょっと周り見る余裕持てよ

「え...」

「ほい、バトンタッチ」

痛いところを突かれて詰まった所で、俊介は突然踵を返した。入れ代わりに出て来た和臣の肩をポンと叩いて教室に戻って行く。

和臣は俊介がいた位置に立って、小さく伸びをした。

昨日の事を何か話した方がいいだろうか...そう思えば思うほど、何を言い出せばいいのか分からなくなってしまう。

「何、話してたの。奈良と」

「ん...別に、世間話...？」

「そっか」

目だけ動かして和臣の横顔を見る。こうして和臣を見る度に思う。この人が朝矢を好きだなんて、夢じゃないかって。朝矢を求めているなんて。

和臣と抱き合ったら、もっと現実に近付くだろうか。もっと深く繋がったら...

「...あのさ、トモ。」

「うん？」

「俺、後悔したくないから。無理しないでくれよ」

昨日の事を、やっぱり和臣は気にしている。中途半端な朝矢の態度が原因で。

朝矢は黙って、何度も首を横に振った。

「してないよ。無理なんか。俺、ほんとに経験ないから...びっくりしたけど」

これだけは、ちゃんと伝えなきゃ。声が震えているのが自分で分かったけれど、そのまま続けた。

「俺も、したいから。オミと、全部.....」

和臣からは返事がなかった。

もしかして、聞こえなかった？

そう思って和臣を見ると、今まで見た事もないような顔をしていて。

嬉しそうな、困ったような、照れたような。

そんな顔でじっと見られたら、どうしたらいいか分からなくなってしまう。

「な、何だよ...」

「何っておまえ...」

和臣は急に視線をうろろさせてしばらく黙っていたけれど、ふっと短く息を吐いてからもう一度朝矢に向き直った。

「土曜日、うち来る？」

「え、うん...」

「...泊まってくよな」

ああ、ついに。

週末、「その時」を迎えるらしい。

第6章（1）

土曜日、朝。

朝矢は和臣のアパートに向かう道を歩いていた。

和臣から好きだと言われた日に、初めて自分で歩いた道。

今日は...和臣の言う通り泊まっていけば、きっと...

この道を歩くたびに、和臣との関係が変化するような気がする。

金曜までは普通に過ごした。

というより、努めて普通に振る舞った。

少しでも気を抜くとどうしても今日のことを考えてしまって、和臣の顔をまともに見られなくなってしまう。

和臣も少なからず同じ気持ちでいたようで、いつものスキンシップもどこかぎこちなく、俊介が離れたところからニヤニヤ見ていたっけ。

アパートの階段をあがってドアをノックすると、すぐに和臣が出てきた。

「入って」

部屋に入ってドアを閉めると、一気に力が抜けてため息が出る。

（何を緊張してるんだよ、俺は...）

意識しすぎかもしれない。

「トモ、ちょっと携帯貸して」

「え？ああ...」

急に言われて理由を考える間もなく渡すと、和臣は朝矢の携帯でどこかに電話をかけるようだった。

「ちょ、何やって...」

「しっ。.....あ、もしもし。いえ、木下ですけど。おはようございます。すみません、朝から朝矢君をお借りして...」

「！」

和臣の口ぶりや話の内容で、朝矢の家にかけて母さんと話しているのだと分かった。予め朝矢から「泊まってくる」とは言っているものの、和臣自らも断りを入れるつもりらしい。

動揺している朝矢の傍らで和臣はいつものように和気あいあいと話を進めると、朝矢には一度も代わらずに電話を切ってしまった。何食わぬ顔で携帯を返される。

「電話代、ごめん。今度おごるから」

「いや、そんなのいいけど...別にオミから断り入れなくてもよかったんだぞ？信用されてんだし」

「だろうなー。悪いわねーよろしく願いしますって言ってたよ、おばさん」

セリフ部分に軽く物真似を入れて、和臣は結果オーライとばかりにウインクしてみせた。

和臣の前向きな所や楽観的な所は好きではあるけど、たまに朝矢の理解を超えているような気がする。母親もよく和臣に『うちの朝矢をよろしく願いします』みたいな事を言っているけれど、息子の同級生に何もかも任せて安心だと思っているのだろうか。

「トモン家にはすっかり公認だな、俺達」

和臣が嬉しそうに言って抱き締めてくる。

「俺、別に付き合ってるとか言ってないけど...」

擦り寄せられる頬に少し応えて、和臣の背中に腕を回す。今まで和臣みたいなタイプが朝矢をこんなに慕ってくれるなん

てなかったから、母親が喜ぶのは良く分かる。でもさすがに、いつの間にかこんな関係になっていて、仮にも長男である朝矢が抱かれる側になろうとしているなんて、当分は言えそうにない。

「あ...」

和臣の鼻先が首筋に潜り込んできて、くすぐったさに肩をすくめた。ちゅっちゅっと吸われるうち、この前の事を身体が思い出してくる。和臣のシャツをつかんだ掌が汗ばみ始めていた。

「トモ、いい匂いする...」

「あ、朝お風呂入ったから...ん...っ」

耳たぶを甘噛みされて、思わずぎゅっとしがみついてしまった。和臣は大丈夫というように朝矢の背中を撫でると、一旦身体を離す。

「じゃあ、トモは準備オッケーだ」

「え？」

「俺もシャワー浴びてくるから、ちょっと待っててくれる？」

容易にセックスを想像させるその言葉に、朝矢の心臓はどくんと跳ね上がった。

第6章（2）

時計の音。

時折外を走り過ぎるバイクや車の音。

それから、シャワーの水音。

（どうしよう...）

床の上で膝を抱えて、何度も何度も自分を落ち着かせるように深い息を吐いた。

（本当に俺でいいのかな.....）

「あ.....」

シャワーの音が止んだ。

しばらくすると少し離れた扉の向こうで、ドライヤーの音が聞こえはじめる。

じっとしていられなくて、朝矢は立ち上がってその扉の前に歩み寄った。

早く出てきてほしい気持ちと、もう少し心の準備をする時間がほしい気持ちとが複雑に絡み合って、ノックもできないまま立ち尽くす。

和臣が出てきたらまず、少し話をしよう。ゆっくり時間をかければきっと大丈夫だ。まだ午前中だし、今日すると決めたからといって急ぐ必要なんてない。

朝矢が勝手に頭で計画を練っていると、鞆の中で携帯が鳴り始めた。

部屋に戻ってチェックしてみると俊介からのメールだった。

『がんばれよ』と一言。

「あいつ...」

妙に鋭い俊介のことだ、今週の朝矢たちを見て何かあると思ったに違いない。好奇心もあろうが、ちゃんと心配もしてくれているであろう俊を想像して苦笑した。いや、本当にただおもしろがっているだけかもしれないけれど。

ご心配なく、と返信して気がつく、ドライヤーの音も止んでいる。

朝矢が振り返るとほぼ同時に、和臣が出てくる場所だった。

「電話？」

「ううん、俊から...。がんばれよってさ」

「参るよなあ、あいつ...」

和臣は朝矢と同じことを思ったようで、肩をすくめると冷蔵庫から水を出して一気に飲み下した。喉、鎖骨、胸、腹筋...裸の上半身に、急に意識が変な方に向いてきてしまう。

冷蔵庫にボトルを戻して朝矢の隣に腰を下ろした和臣からは、ふわりといい匂いがした。

まるで媚薬のように誘惑する香りに引き寄せられるように、朝矢は和臣の頬に唇を寄せた。そっと押し当てて離すと、和臣が少し驚いたようにこちらを向いた。それはすぐ、柔らかい笑みに変わって。

「トモ、唇乾いてる.....緊張してる？」

頷くより先に、唇が塞がれた。

軽く押し付けるように合わされた唇はすぐに離れて、また触れあって...何度も繰り返すうちに、乾いていた朝矢の唇

はしっとりと濡れてきていた。

静かな部屋に、ちゅ、ちゅ...とキスの音が鳴る。

どちらからともなく腕を伸ばして、ぎゅっと抱き合った。

「緊張、解けた？」

「ばーか、ますます緊張するっての...」

顔を見合わせてくすくすと笑い合う。

和臣の腕は不思議だ。さっきまで感じていた心許なさがずっと晴れていく。

「...よっと」

和臣は朝矢を抱き直すとそのまま立ち上がって、朝矢をゆっくりベッドに腰掛けさせ、自分は床に膝立ちになって朝矢と向かい合った。

「トモ」

手を取られ、真剣な目で名前を呼ばれてどきりとする。

和臣は選ぶように言葉を紡いだ。

「俺...正直、上手くできるか自信はない。どうしたって、トモの体に負担をかけることになると思う」

「うん...」

「途中で嫌だったら、ちゃんと言ってな」

朝矢の手を包んだ和臣の手が少し汗ばんでいる。多分、シャワーを浴びたばかりだからじゃない。和臣も緊張しているんだと思った。

自分が緊張しているのに、朝矢のことを気づかってくれる優しさが嬉しい。

今度は、朝矢が和臣の緊張を解いてあげる番だ。

「オミ、こっち来て」

和臣の手を引いて、朝矢の膝に乗せるように座らせる。背中に腕を回して抱きしめると大きな子供を抱っこしているような感じで、自然と笑みが漏れた。

「俺、ずっと自信がなかったんだ。オミが俺のことなんか好きになってくれる訳ないと思ってたし、その...こういうことしたいと思ってくれるのも、なんか申し訳ないって思った。俺でいいのかなって」

和臣は皆に好かれる。単に友達としての好きじゃなくて、恋愛感情を持って接する女の子も今までにたくさんいたろう。中には和臣と釣り合うような、素敵な子もいたはずだ。

香織だってそうだ。あんなにお似合いだったのに、和臣は彼女より朝矢を選んでくれた。

「オミが真剣に俺のこと考えてくれて嬉しい。ありがと...」

「トモ...」

和臣の体重がぐっとかかって、朝矢の背中がベッドに沈んだ。

第6章（3）

いよいよ今からという体勢に、解けかけた緊張が高まる。

しかも外は明るい。電気をつけなくても外光だけで十分なほどだ。

「オ、オミ...一つだけお願い聞いてくれる？カーテン閉めてほしいんだけど...」

朝矢が頼むと和臣はああ、と言ってすぐに閉めてきてくれた。遮光率の高いカーテンが、部屋を程よく暗くしてくれる。

戻ってきた和臣はベッドに腰掛けて上体だけ倒した状態になっている朝矢の足を上げさせてきちんと横たえると、改めて朝矢を跨ぐように上に乗って、顔の横に手をついた。

「じゃ、俺からも一つお願い」

「うん？」

「自分のこと、『なんか』って言うなよ。トモだからしたいんだ。初めてなんだよ、他の人にこんな気持ちになったことなんかない」

「うん...」

ん？今何て言った？

和臣の言うことに微かな違和感を感じたけれど、疑問が口をついて出る前に飲み込まれてしまった。

「ん...ん、あ...」

キスをしながら脇腹を撫で上げられて、小さく声が漏れたところで唇の隙間から舌を差し入れられる。

「あ...はんっ...んう」

舌を絡めとられるとすぐに息が上がって、頭がぼーっとしてきてしまう。それを、体を這い回る和臣の手が引き戻した。ただ撫でられているだけなのに時折体がピクンと跳ねて、喉の奥から変な声が出るのを抑えられない。

「ん、んふっ、んあ！」

脇腹から上に移動した和臣の指先が胸の突起を掠めた時、朝矢の体は大袈裟なほどに震えて快感を訴えた。

和臣は唇を離して体を起こすと、朝矢を見下ろして熱っぽく息を吐く。

「トモ、エロい...」

「.....！！！」

いきなり何を言い出すのかと耳を疑った。

裸の上半身、濡れた唇、心なしか上気した頬、熱の籠った目...今の状態なら和臣の方がよほどなのではないだろうか。

でもそれを口にするのは憚られて、和臣の視線から逃れるように顔を背ける。

見られているだけで、体の熱が上がってしまいそうだ。

裾をたくし上げる和臣の手を助けるように背中を浮かして、トレーナーを脱がされる。

涼しくなったと思ったのは一瞬だった。

和臣が再び覆いかぶさってくる。

シーツと背中の中に腕を回されて、ぴったりと体を密着されたまま口づけられた。

「んっ...あふ、ん、オミ...っ...」

何も隔てるものなく肌を触れ合わせているので、うるさいくらいの鼓動が和臣に伝わってしまうのではないかと思うのに、腕を解くことができない。

和臣の頭を掻き抱くように、キスに夢中になった。

「は...トモ、ギャップありすぎ...」

「な、あ...っ！」

何が、と聞く前に和臣の舌が首筋をつつと舐め上げて、背筋をぞくぞくっと駆け上がる感覚に身を振る。

甘噛みされると、腰が疼くような気さえた。

現に体の中心で欲望が兆し始めている。

何日か前に同じベッドでしたことが思い起こされて、振り払うように力なく首を振った。

「...この前の跡...」

「え...？」

「薄くなってる。つけ直していい？」

「い...っ、」

急に噛み付くように強く吸われ、微かな痛みにぎゅっと目を閉じる。

きっと以前よりはっきりと濃い跡がついただろう。

「ごめん...トモ。トモのこと独占したくてたまらないんだ。こうやって跡つけて、誰にも触らせないようにして...」

苦しそうな声。和臣はその場所を癒すように舌を這わせながら、さらに続ける。

「他のやつに見せたことのない顔、俺にしか見せないで...」

「あっ！」

さっき掠めた突起を指先で押しつぶされて腰が浮く。そのまま摘んだり転がしたりされて、ピリピリと電流を流されたような痺れを感じた。

「あ、あっ、あんっ...やあ...」

「そんな声も、俺以外のやつに聞かせたりしないで...」

「...なわけ、ああっ...！」

反論する間もなく、ぬるついた舌がそこを包んで喉が震える。

あまりにストレートに伝えられる和臣の独占欲が性感に直結して、体が素直に悦びを表現する。

「トモのことが好きすぎて、おかしくなりそうだ...」

「あ...あ...だめ...っ、っ.....！」

無意識に動かした脚に触れた和臣の昂りを感じ取った瞬間、既に達しそうなほど張りつめている自分自身に気がついた。

第6章（4）

「は...あ...オミ、やっあ...」

「ん...」

指先ですのと同じように、尖らせた舌先でつつかれたり、吸われたり。

それ自体は気持ちいいのか悪いのか分からないのに、体は限界に向かって高まって行く。

「あ...もうっ...あ...！」

「トモ...？」

切羽詰まった朝矢の声に気づいたのか、和臣が動きを止めて顔を上げ、目尻にたまった涙を拭ってくれる。

その手に触れると、優しく握り返してくれた。

「ごめん、嫌だった？」

ふるふると首を振る。

「じゃあ...」

和臣の指先が胸の間に置かれ、つつ...と臍のあたりまで滑って行く。

「ひうっ...」

「気持ちよかった？」

そう言って目を細める和臣は、どこかサディスティックな笑みを浮かべていて。

目が合った途端にまた、ひくりと震えるのが分かった。

「あっ...」

「...脱がすよ。いい？」

ベルトを緩めてフロントのボタンを外し、ゆっくりとファスナーを下げられる。

割とゆるめのパンツのはずなのに、勃ち上がったものが引っかかって思わず息を詰めた。

和臣の手が下着ごと掴んで、そっと下げる。

羞恥に耐えながら目をきつく閉じて、されるがままそこが露になるのを感じた。

少しでも隠したくて膝を立てると、足首まですっかり抜き取って、丁寧に靴下まで脱がされる。

何も身に付けていない状態で和臣の目の前にいるのだと思うと、恥ずかしくて死んでしまいそうだった。

なのに高められた体は直接的な刺激を求めて疼くことを止めない。

「オミ...」

和臣はスウェットを脱いで自分も裸になると、朝矢の膝を開かせて脚の間に体を割り込ませた。

「...トモ、自分が今どんな顔してるか分かってる？」

「わ、わかんない...」

「俺をこんな風にさせる顔」

「あ...！」

手を導かれて触れさせられたもの。

想像していた以上に熱くて、硬くて...

先端のぬめりが和臣も興奮していることを表しているようで、朝矢自身からもまたじわりと溢れる感覚があった。

「トモも、こんなに...」

「ああ...っ！」

待ちわびた刺激。

和臣の掌が朝矢自身を包み込んで、ゆるゆると上下に動き出す。

全く触れられないままほとんど限界まで高まっていたそれは、後から後から蜜を零して和臣の手を汚していった。

くちゆくちゅとあられもない濡れた音がして、その音に朝矢の喘ぎ声が混ざって聞こえる。

「あっあっ、あ、ん、っあああ...」

「...は...興奮する...」

「あ、ああっだめ、ああ、あ、あう...！」

朝矢のものを扱く速度がどんどん速くなり、抗うことのできない快樂に半開きになった口の端からとろりと涎が垂れる。

「あっ、あっいく、も...っ」

絶頂を訴えると和臣は朝矢の太股に手をかけてぐっと開かせ、あろうことか先走りでぐちゃぐちゃになっているものを口に含んで吸い上げた。

瞬間、頭の芯が真っ白にスパークする。

「ふぁ、あ...っあああ.....！！！」

体が言うことを聞かず、自分のものではないみたいにビクビクと痙攣する。

一度達した後も和臣が根元を扱き続けるのに合わせて何度か余韻を吐き出して、ようやく解放された時にはぐったりとシーツに体を投げ出したまま指一本動かさない状態になってしまっていた。

遠のきかけた意識の中、和臣がごくりと喉を鳴らす音が聞こえた。

「あ...は...あ...」

未だ震えの収まらない体が、凄絶なオーガズムを物語る。

指が唇を辿る感触に気がついて薄く目を開けると、朝矢の顔を覗き込む和臣の目があった。

「トモ、大丈夫？もうやめようか？」

「ん...」

首を横に振って答える。

せっかくここまで来たのに、途中でやめるなんて出来ないと思った。

今止めてしまったら、二度と出来ないような気がしたから。

それに...

「っ...、トモ...っ」

目の端に映った、勃ち上がったままの和臣自身に手を伸ばす。届き切らなくて指先が先端を掠めると、下腹部につきそうなほど反り返ったそれは微かに反応を示した。

「最後まで...して...」

「トモ...」

朝矢ばかり気持ちよくしてもらって、和臣がそのままでは何の意味もない。

和臣が朝矢としたいと言ってくれたのだから、その気持ちに応えるためなら自分の体がどうなっても構わないと、この時思った。

第6章（5）

頭の下から枕を抜き取られ、タオルと一緒に腰の下に敷かれる。

一度ベッドを降りた和臣は、クローゼットから箱を二つ出して戻ってきた。

一つの箱からはボトル、もう一つからは小分けの薄いパッケージを取り出す。

朝矢の視線に気づいた和臣が、少し言いにくそうに口を開いた。

「...必要だろ。その、するんだったら」

「持ってたの...？」

「...っ、いつかトモとすると...って、恥ずかしいこと言わせんな」

和臣は照れたように言い放つとローションの蓋を開けて、粘度の高そうな液体を指に絡ませた。

休日に和臣がつけている香水のような、柑橘系の香りがふわりと漂う。

オミはこういう匂いが好きなんだな...と思っていると、空いた手を片膝の裏に差し入れられ、腰が少し上がるように力を入れられた。

（あ...このカッコ、少し恥ずかしい...かも）

多分、いや絶対、後ろまで和臣に丸見えの格好だ。

遮光カーテンで部屋が暗いとはいえ、何がどこにあるか見えない暗さじゃない。

少しは隠れるかと腰をもじもじ動かしていると、

「やっぱりやめる？トモが嫌だったらしないよ」

和臣は一旦朝矢の脚を下ろして、もう一度聞いてくる。

「ううん、ごめん...ちょっと恥ずかしいだけだから...大丈夫」

「恥ずかしいなんて言われると逆に興奮するな...」

苦笑しながら改めて体勢を整える和臣を少し睨んでやってから、深呼吸して目を閉じた。

「...触るよ」

「ん...っ...」

ぬるりと、孔の周りを辿るように指を這わされる。

ぐっ、ぐっと何度か確かめるように押された後、指先が潜り込んできた。

「んうっ.....」

ざわっと、全身に鳥肌が立った。

下肢が強張る。

「トモ、力抜いて。息吐いて」

「ん、ふ...は...あっ...あ...」

「そう、その調子...ほら、一本入った...」

指が奥に進む度にぞわぞわと未知の感覚が駆け巡り、目の前がチカチカする。

腕を顔の前にかざして、必死に耐えた。

「は...は...」

しばらく指を中に埋め込んだまま、和臣は動かない。

「オミ...？っあ...！」

腕を上げて様子を伺おうとした途端、ずるっと指を引き抜かれて再び目を閉じる羽目になった。

「あ...あ...待って、んん...！」

傷つけるような激しい動きではないけれども性急に指を抜き差しされ、誰にも触られたことのない所を擦られる感触に全

身がむず痒いようなもどかしさを感じる。

「トモ...すっげえやらしい...ここに俺のをこうするんだと思うとマジで興奮する...」

「や...っ...」

熱に浮かされたような和臣の呟きにゾクゾクする。

言われたことで指のピストンがまるで和臣自身のように思えて、どうしようもなく息が上がった。

「もう一本入れるよ...」

「ん...んっ、んっあ、あ...っあっあっ、あっ...」

今度は慣れるまで待つことなく、一度奥まで入った指はすぐに内部を蹂躪した。

本来そこからはするはずのないぐちゅぐちゅという濡れた音にも犯されているようで、瞼がじんと熱くなる。

瞬きするとぼろぼろと零れ落ちた。

「あう...あっ...やあ...」

「トモ、気持ちいい...?」

訳が分からなくて泣きながら喘いでいると、和臣の声が降ってくる。

「わ...わかんないっ...」

これは本当だ。本当に気持ちいいのかわからない。でも。

「でも、勃ってきてる...」

「ひあ...!」

両手が塞がっている和臣は、朝矢のそこに顔を近づけて舌を這わせる。

舌先がくびれに引っかかって、とぷんと溢れたものが伝い落ちるのが分かった。

羞恥にさいなまれて、声が出るのを我慢していると呼吸が苦しくなってくる。

「ん...っう...っ、は、あ...っ」

「トモ...我慢しないで」

「やあっ...も、無理...っ、死んじゃう...っ...」

叫ぶように訴えると、和臣の手がぴたりと止まった。

押さえていた膝の裏から手を離して、朝矢の額に張り付いた前髪をかき分け、震える瞼と唇にキスを落とす。

「...この状況で死んじゃうって言われると、褒め言葉のような気もするけど...」

「...?」

「いや、ちょっと興奮しすぎちゃったな。ごめんな」

和臣はもう一度朝矢を宥めるように口づけると体を起こして、二本の指を抜けるぎりぎりまで引き、ローションのボトルを手に取った。

「今度はゆっくりするから。ちょっときついかもしれないけど、もう一本入れるよ?」

とろっ...と、孔と指の境目にローションが垂らされる。

指が二本入っているところにもう一本沿えられ、ぐっ...と力を込められる。

和臣の言った通り、三本目はそれまでよりかなりきつく感じた。

「トモ、痛くない?大丈夫?」

声をかけながらゆっくり指を進めてくる和臣に答えて、首を縦に振る。

異物感はあったものの、痛みはほとんどなかった。

これなら和臣のもちゃんと入るかもしれない...と、ぼんやり思う。

奥まで入ると、またゆっくりと、今度は内部を拵げて慣らすように指が動く。

第6章（6）

「う...はあ...あ...」

襷の一枚一枚を擦るような焦れた動きが、逆に何をされているかを認識させる結果になって余計に恥ずかしい。ゆっくり動かしているから音がしないかというところでもなく、時折ニチュ...と聞こえる音も羞恥を煽った。

（やばい、逆効果かも...）

でもさっきみたいにしてほしいとも言えない。

じれったくて震えていると、和臣が耳元で囁いてきた。

「...今何考えてる？」

「んっ...」

耳介を甘噛みされ、噛んだところを舐められて、体に力が入る。

「あ...今きゅって締まった。耳も弱いんだね、トモ...」

「んん...！」

実況中継のような物言いに、かっ顔が熱くなった。

和臣は指をゆるゆると動かし続けながら、さらに低い声を吹き込んでくる。

「俺の考えてること、教えてあげようか」

「...っなに.....」

「さっきも言ったろ。俺のをトモのここに挿れて、こうやって動かして...」

「な...っ、」

「熱くて、狭くて、ぬるぬるしてて...たまらなく気持ちいいんだろうなって...」

「や...っ言うなよ...っ！」

あまりの言われように涙さえ浮かんでくるのに、銜え込んだ所はひくついて締め付けるように蠢いてしまう。

中の指にもそれが伝わったのか、和臣は熱い吐息を漏らした。

「こんな風にされたら、すぐイキそう...」

「だから言うな...っあん...！」

突然ずるっと指を引き抜かれ、朝矢自身の熱と擦られる摩擦で熱くなった内部が外気に触れてぞくりとする。

和臣を見るとティッシュで指を拭いて、ゴムの袋を破いているところだった。

「あ.....」

想像に難くないこの後の行為を思うと、否が応にも鼓動が早まった。

和臣がゴムを着けるのを見ていると、さっき触れさせられた時の感触が脳内に甦る。

指とは違う、それ自体が熱と芯を持った...

あんな杭のようなものを打ち込まれたら、自分の体はどうなってしまうのだろう。

期待と不安が入り交じり、ぶるりと震えた。

「トモ...」

ゴムの上からもローションを垂らして馴染ませると、和臣は朝矢の両脚を開かせて、先端を入りに押し付けた。

「.....慣らしたから大丈夫だと思うけど、痛かったら言って」

こくりと頷く。

覚悟は決まっているのに、いよいよだと思うと体が震えて、朝矢は和臣の腕を縫るように掴んでしまった。

和臣は一旦腰を引いて、心配そうな顔で朝矢を覗き込む。

「怖い？やっぱりやめる？」

ああ、こんな時にまで。

今やめたら自分が辛いのに、和臣は。

目の前の男への愛しさで胸がいっぱいになり、そして確信した。

この人を好きになってよかったと。

「オミ」

腕を伸ばすと応えるように顔を寄せてくれた和臣に、自分からキスをする。

「俺...オミが好きだよ。だから...」

「トモ...」

「ん...」

和臣から返されたキスを、体全体で受け止める。

「んっ、ふ...ん...」

舌を絡めながら、和臣が朝矢の腰を抱え直すのを感じた。少しでも和臣が楽なように、自分から膝を開く。

「...挿れるよ」

キスの合間に囁かれ、次の瞬間訪れた衝撃に押し出された声は、また口付けに吸い取られた。

「んうっ...う...！」

苦しい。

想像以上の圧迫感。

前儀の時とは違う呻くような声が、和臣が腰を進める度に押し出されるように喉を抜けて行く。

和臣に唇を塞がれたままで呼吸もままならず、頭の芯が痺れてきた時。

「.....っ、は...」

不意に和臣が顔を上げて深く息を吸い込んだかと思うと、またそこに力がかけられる。

「あ...！」

先端がずりりと潜り込んで、埋め込まれた場所が目一杯広がっているのが分かる。

ローションのおかげか引きつれるような感じはないものの、まるで体の中心から串刺しにされている気分だった。

和臣は浅い呼吸を繰り返しながら、奥へ奥へと侵入ってくる。

最初の遠くなるような圧迫感は幾分薄れ、今度は体の中を割り開かれる感覚に背筋が震える。

「あ、あ、まだ...っ？」

このままでは貫通してしまう気さえして、思わず和臣に訊ねた。

「ん...もうちょっと、っ...」

「あぁっ.....」

ずずっ...と進む感触の後、和臣が体の力を抜いて朝矢の肩口に顔を埋め、深呼吸をする。気づけばそこはぴったりと密着していて、ようやく全部入ったのだと分かった。

朝矢も脱力してシーツに沈み込む。そうして初めて、迎え入れた和臣自身が脈打っているのを感じた。

途端にぞくりときて無意識に締め付けてしまうと、和臣が小さく息を詰めた。

「トモ...」

「うん」

上体を起こした和臣と至近距離で見つめ合う。

きっと、思いは同じ。

「全部、入ったよ。痛くない？」

「ん、大丈夫...」

「でも、きつかったら。ごめんな...」

「あっ...」

和臣の指先が、挿入に耐えている間に萎えてしまった朝矢のものにそっと触れる。

確かに、今の朝矢の体は快楽を表してはいない。

でも。

「オミ...」

背中に腕を回して、抱きしめる。

一つになれた喜びを、全身で和臣に伝えたかった。

第6章（7）

「オミ、俺、俺...」

上手く言葉が出てこない。言葉の代わりに、涙が溢れた。

それを吸い取るように口づける和臣の唇を追って、自分のそれと重ねる。

「んっ、ふ、んっん...」

「うん、トモ...俺も幸せ。すっげー幸せ...」

和臣の声にも、感情の高ぶりがにじみ出ているように思えた。

泣きながら、何度もキスをして。

涙が落ちてきてきた頃、和臣がゆっくり腰を揺らし始めた。

根元まで埋め込んだまま奥に押し付けるように何度か揺らして、それからゆっくり引いて、また押し込んで。

様子を伺うような動きが、徐々に一定のリズムを刻み始める。

隙間なく和臣を包んだ内壁がざわざわと蠢いた。

「あ...あ...」

指とは違う、それ自体が生きているような熱い塊。

出し入れされると摩擦でさらに熱を持ち、大きく育って行く。

まるで未知の生物の中から喰われてしまうような...

「あっんっ.....あ、あ...」

「は...あ、やば...」

朝矢を揺さぶりながら、和臣が掠れた声で呟く。

「マジで、すぐイキそ.....」

「.....！」

そう言って前髪をかき上げる和臣に視線を向けてしまったことを、朝矢は心底後悔した。

寄せられた眉、情欲をたたえて伏せられた目、しっとり濡れた裸体、汗の匂い.....それは今まで目にしたどんなものよりもいやらしくて、扇情的で。

ゾクゾクと体内を支配して行くものの正体が分からないまま、目を逸らせなくなってしまった。

「あっは...ああ...あ...っあ、嘘っ...」

体の中心に熱が集まって、そこが頭をもたげ始める。

後ろに抜き差しされる直接の快楽ではない。

泳ぐような腰使いで朝矢を犯す和臣の姿に、和臣に犯されている...和臣とセックスしているという現実、言いようのない興奮を覚えた。

「あっ...あっ...オミ...」

「っトモ、は...っ...」

「あぁっ...！」

激しくなる揺さぶりにずり上がる朝矢の腰を和臣が掴んで一気に引き戻す。

奥の奥まで突かれて、電流が流れたように背中がしなった。

和臣はそのまま逃がさないとも言うように朝矢の腰を離さず、さらに激しいピストンを繰り返す。

「や...いや、いやぁっ.....！」

突かれる度に自分自身から蜜が溢れ出して下腹部を濡らして行く。

朝矢を見下ろす和臣の目に映っているのだと思うと、いけないと思うのにますます熱を帯びて止められなかった。

「あ、あつ、あつあつ、んんん...っああ...！」

もはや凶器と化した和臣のものに激しく蹂躪されて、朝矢はもう身悶えるしかない。

和臣が入り出す場所からぐちゅぐちゅと濡れた音が聞こえて、あまりに淫らでいたたまれなくなる。

目尻から涙が伝い、振り払うようにかぶりを振った。

「...すげえくる...」

「ん...っや...見ないで...っ...」

荒い息を吐く和臣の目は、まるで獣のようで。

レーザーで焼かれるように、その視線が辿る所がチリチリと熱くなった。

それは触れられていない自身にも及んで、むず痒くてたまらない。

視覚、触覚、嗅覚、聴覚...あらゆる感覚が、朝矢を煽るには十分すぎる材料を次々に送り込んで来るのに、決定的な刺激が足りなかった。

熱を解放するための、そこへの直接の刺激が。

「あっあん、あう、あああ、ああ...」

無意識に腰を上げて和臣の腹に擦り付けようとしても、両手でがっしりと掴まれていて叶わない。

和臣は本能のままに欲望を打ち付けて、絶頂へ向かおうとしている。

これ以上続けられたら狂ってしまいそうだと思った、その時。

「...っは...イク...」

「え...っあああ...！」

眩きと共に、和臣の手が朝矢を握り込んだのだ。

「トモ...一緒にイッて.....」

「ああっ...んあつ、あつダメ、はああんっ...！」

全身に鳥肌が立って、ガクガクと痙攣を始める。

和臣の動きに合わせて上下に扱く速度がどんどん増し、あっという間に昇り詰めていく。

「...中、うねってる...ん...っ...」

「あ、あ、も...もうっ、だめ、ダメ...っ！」

体の奥に渦巻いていたものが一気に駆け上がる。

涙の膜が張った視界が、白く霞んで.....

「...っ、トモ、」

「あ、あつあつあッあ、っあ、ああああ.....っっ！！」

和臣の指の腹で先端をぬるりと触れた瞬間、完全に真っ白になった。

「ん...っ！...ん...は...あ...」

「あ...あ...あん...」

ヒクつく中に一際強く突き入れて、一瞬和臣が動きを止める。

どくんと脈打った後、ゆるゆると動かしながら時折ビクリと跳ねる様が、絶頂の余韻に震える体には敏感に伝わってきた。

（オミが、俺の中で...）

「...ん...」

口づけられて、朝矢は満ち足りた気持ちで目を閉じた。

第6章（8）

「...トモ」

「.....」

「トモ、こっち向いて」

「.....」

はあ、と和臣のため息が頭上で聞こえる。

...初めてのセックスが終わった後、呼吸が整うのを待ってから体を離して。

抜け出て行く和臣に幾許かの名残惜しさを感じたのも束の間、和臣はティッシュを取って、自分の後始末より先にさっきまで入っていた朝矢のそこを拭き始めた。

「お、オミ、いいって、自分でやるから...！」

慌てて抑えとどめようとしても、腰から下が怠くて思うように動けない。

結局、ティッシュであらかた体にまわりついたものを取り除いてから濡れタオルで全身きれいに拭かれるまで、だんだんはっきりしてくる意識の中で朝矢は羞恥に耐える羽目になったのだ。

そうしていると、セックスの最中のことがまざまざしく思い出されて...

和臣が自分の後始末を済ませて、体を拭いたタオルや朝矢の腰の下に敷いていたタオルを洗濯機に放り込んでいる間に、朝矢はベッドの足元に丸まっていた毛布を頭まで引き上げ、枕を抱きしめて壁を向いて丸くなっていた。

そして、戻ってきて毛布に潜り込んできた和臣に後ろから抱きしめられて、今に至る。

「.....」

ため息をついたきり黙ってしまった和臣に、少し不安になる。

怒らせてしまったらどうか。呆れられた？

枕をさらに強く抱き込んで、顔を埋めた。

「...ごめんな」

しばしの沈黙を破ったのは、和臣の謝罪。

「体、きついだろ...俺、トモのこと考える余裕なくなってたから...」

「ちが...」

朝矢は、そんなこと思ってない。

「...幻滅されてもしょうがないよな。やっぱり俺、...その、初めてで舞い上がっちゃって...」

え？

「でも、トモと出来てほんとに嬉しかっ...うわっ」

「は、初めてってホントかっ?!」

勢いよく振り返った朝矢に、和臣は驚いた様子で言葉を失う。

「初めてって...ホントか...？」

改めて問い直すと、みるみる真っ赤になっていく。

意外な反応に、今度は朝矢が言葉を失った。

「最初に言っただろっ、上手くできるか自信ないって...！」

しどろもどろになりながらの和臣の言い分を頭の中で整理する。

その意味を理解した途端、嬉しさがじわじわと込み上げてきた。

抱きつきたいのをこらえて、まずは。

「オミ、ごめん...！」

まだ前に抱えたままの枕にぱっと顔を伏せて、和臣に謝る。

「俺、てっきりオミは経験あるんだと思ってたんだ...だから、俺の方こそ幻滅されたんじゃないかと思って、は、恥ずかしくて...」

「...なんで俺が経験あると思ったの？俺ってそんな遊んでるように見えるのか...？」

少し悲しそうになった和臣の声に、必死で否定する。

「違う、だって、オミは昔からかっこいいし、モテるし、それに...」

キスもセックスも上手い（気がする）し。

悔しいからそれは言ってやらない。

その代わりに、抱えていた枕を頭の方にどかして、和臣にぎゅっと抱きついた。

「嬉しい。俺がオミの初めての相手になれて」

どんなにかわいい子より、きれいな子より、自分を選んでくれたことが。

「本当？無理させたし...後悔してないか？」

「してないよ...オミが俺のこと大事に思ってくれてるのも分かったし」

自分のことを二の次にして、何度も何度も朝矢を気遣って。

こんな自分を「独占したい」とまで言ってくれて。

「ありがとう、オミ」

体に負担がなかったかと言えばそうじゃない。

初めてのことでだらけで混乱して、みっともない姿を見せてしまったかもしれない。

でも、好きな人と一つになれる喜びを、和臣は教えてくれた。

「俺も...ありがとう」

抱きしめる腕と優しい唇を受け止めて、朝矢は改めて、幸せだと感じた。

第7章（1）

「おはよう、トモ」

「...はよ」

週が明けて、月曜の朝。

いつものように和臣の自転車の後ろに跨がる。

初めて体を繋げた土曜日、まだ明るいうちからコトに及んでしまったおかげでその日は何もできなかったけど、朝矢の体を心配した和臣があれこれと世話を焼いてくれて悪い気はしなかった。

（もっと早く決心してもよかったのかも）

あれこれ心配したけど、好きな人と抱き合うのがあんなにいいものだとは思わなかった。くっついて一緒に眠る温もりだとか、全てが心地よくて、幸せで。

（ますます好きになったかも）

自転車をこぐ和臣の背中に額をつけて、自然と漏れる笑みをごまかした。

10月半ば、秋晴れの空は爽やかな青で、吹く風も心地良い。

「んー、気持ちいいー」

最近まであんなに暑かった教室のバルコニーも、季節の移り変わりと共に時間つぶしにはちょうどいい場所になってきた。もっとも、いつも出ているのは和臣と朝矢、それから...

「よっ。お邪魔ー」

俊介。だいたいこの3人のローテーションになっている気がする。

朝矢の隣に来た俊は、和臣と朝矢を見比べて悪戯っぽい笑顔を見せた。

「元に戻ったな」

先週の、なんとなくぎこちない雰囲気はなくなったと言いたいんだろう。無理もない、先週は土曜に初体験を控えてお互いに意識してしまっていたんだから。

でも、過ぎてみれば不安は消え去って、俊介が言うように元に戻ったところか、これまで以上に自然に一緒にいられるようになったように思える。

和臣を見上げてふふっと笑ったら、横から俊介の手が伸びてきて頬を突かれた。

「なーに思い出し笑いしてんだよ。さてはあっちの相性もバッチリだったんだろ、やーらしー」

「ばっ...何言ってんだお前！」

「はいはいストップ」

かーっと血が上って俊介に掴み掛かろうとしたところを、和臣に引っ張られて止められた。和臣は片腕で朝矢の首元をしっかりとホールドして、

「知りたいか？どれくらいバッチリだったか」

俊介に向かって不敵な笑みを浮かべながら言っただけだ。

「いや、結構。他人のノロケを喜んで聞く趣味はないんでね」

俊はひらひらと手を振って肩をすくめて見せて。

「よかったな。...うらやましいよ、お前ら」

ぽつりと。視線を落として呟いた俊介からは、いつものへらへらした色が消えていた。

文化祭まで、あと2週間ちょっと。

朝矢たちは帰宅部なので準備らしい準備はないけれど、なんと言っても後夜祭の出場を控えているので練習が追い込みだ。和臣は冗談抜きに優勝を狙っているのだから。

「後夜祭の出場者と賞品、発表されたぞー」

文化祭実行委員の声に、皆その手に掲げられた一枚の紙を見に集まって行く。

出場は朝矢たちを含めて5組。バンドからコントまで、ジャンルは様々で見事にかぶる所がない。

優勝者の賞品は...購買で使える金券5,000円分、と書いてあった。

「...なんだ、購買限定か」

「なんで？ノートとか昼飯代とかかなり浮くじゃん」

不満そうな和臣の言葉に思ったままを返すと、和臣は苦々しい表情で朝矢を見る。

「現金の方がよかった...」

「ま、健全に使えるってこった」

いつの間にか横にいた俊介がニヤリと和臣の肩を叩いた。

「健全にねえ.....ん？」

ふと。この前のことが頭を過る。

和臣とのセックスが思った以上に体にこたえた朝矢は、ほとんど一日満足に動くことができなくなったのだ。ということとは。

「...オミ」

「ああ...」

気づいてしまった。

文化祭が終わるまでは、できないということに。

「考えてみればそうだよなあ」

放課後、屋上庭園での練習の合間に和臣がぼやく。暑いと言ってTシャツを脱いだ裸の上半身に汗が光って、何となく思い出してしまう。この先もごく一般的な場面で和臣の裸を見ることなんて多々あるだろうに、これが惚れた弱みなのか、好きな相手が近くに居過ぎるのもなかなか困ったものだな...と、考えながら苦笑した。

「ま、優勝目指して願掛けってことでいっか。賞品は購買の金券と、トモ。な？」

朝矢は結局、和臣のこの笑顔に絆されてしまう。

絶対に勝てることなんてないだろう。

よしやるかと伸びをしたところで、窓から顔を出した先生から服を着ろという声が飛び、朝矢たちはもう一度顔を見合わせて笑い合った。

そして、日の落ちるのが早くなり、練習でかいた汗が冷えて寒さを感じるようになってきた頃。

文化祭当日がやってきた。

第7章（2）

文化祭開催日は祝日ということもあって、生徒の家族から友人、受験を希望する学生等、大勢の来校者で賑わいを見せた。

ちなみに生徒は出し物がなくても全員出席が基本。ということで、朝矢たちも朝から校内をぶらついて、クラスメイトの所属する部活の発表や模擬店を見て回っていた。

「あっ、和臣。幸田君も、いらっしやい」

「あートモ君だー！クレープ食べてってよ！」

クラスの女子が主催した模擬店を覗いたら、お揃いのエプロン姿の香織と結に出迎えられた。

「おーユイ。馬子にも衣装だな、可愛い可愛い」

朝矢より小さい結の頭をぼんぼんしてやると、結はぷっと頬を膨らます。そんな様子を、和臣と香織が笑いながら見ていた。

「食ってけよー、結構うまいぞー」

女子の模擬店のはずが聞こえた男の声。奥に目を向けると、声の主はクレープ生地の色とりどりのフルーツを並べている、ウェイターの格好をした...

「俊かよ！なんでここの手伝いしてんだ？てか似合うな、そのカッコ...」

およそこういう出し物には参加しそうにない男との遭遇はもとより、意外にはまっていることの方がさらに驚きだった。ちょっとした客寄せにもなりそうなほどだ。

「奈良君ね、他に何も参加するものがないみたいだからお願いしたの。男手があると助かるし」

「そうそう、それに奈良って意外と甘党なんだよねー」

こうなった経緯を説明する香織の言葉に被せられた結の補足情報を、俊はやんわり否定する。

「別に甘党ってほどでもねーよ...ほれ、食っとけ。後夜祭出るんなら腹ごしらえしといた方がいいぞ」

甘い香りを纏って差し出されたのは出来立てのクレープ。

「そうだよー！私たちも応援に行くから頑張ってる。はい、もいっこサービス！」

「お、おう...いただきます」

両手のクレープを平らげた後に行く先々で生徒や先生から声をかけられては食べ物ももらい、夕方になる頃にはタダ食いだけで結構腹が膨れてしまった。

「あー、満腹ー」

屋上庭園のベンチに腰掛けて胃の辺りを擦っていると、横から和臣の手が伸びてきて同じ所を撫で始めた。

「パパですよー」

「...やめろ馬鹿。そこは胃だ。てか俺は男だ」

朝矢のパンチをかわして立ち上がった和臣に合わせて、朝矢も立ち上がる。

「結構、いろんな人が応援してくれてんだな。ちょっと感激した」

空を見て、差す西日に眩しそうに目を細める和臣。

「絶対、優勝しようぜ」

朝矢には和臣の方が眩しかったけれど。力強い和臣の言葉に、しっかり頷いて拳を握った。

「うわー...満員じゃん...」

全校生徒が入るだけの講堂は空席が見当たらないほどに盛況で、熱気や歓声がステージ裏にも伝わって来る。

「どうしようオミ、俺緊張してきた」

以前からストリートパフォーマンスしてきた和臣と違って、朝矢は人前で何かすることには慣れていない。体操部の生徒に手伝ってもらって作り上げた大技もある。失敗して和臣の足を引っ張ることだけはしたくないと思うほど、緊張が増して行くようだった。

「大丈夫だって。トモがどこに飛んでっても、絶対受け止めるから」

和臣は任せろというように胸を叩いてみせる。こくりと頷いたものの緊張で強張ったままの朝矢の表情を見て、しょうがないなと腕を伸ばしてきた。

「わっ...」

すっぽりと腕の中に抱き込まれる。周りには、他の出場者や委員の生徒たちもいるのに。まずいと思ったけれど、耳元に和臣の唇が寄せられて声を吹き込まれると、魔法のように動けなくなった。

「絶対、大丈夫だから。何があっても俺が全部フォローするし、トモに怪我させたりしない」

「うん...」

和臣の声を聞いているうちに、不思議と緊張も解けてくる。ステージを窺うと、朝矢たちの前の組が漫才で盛り上げているところだった。

「ステージ、いい感じにあつまってるな」

和臣が楽しそうに目を光らせる。

『ありがとうございますー』

『中田中のお二人でしたー！いやー大爆笑でしたねー。さあ続いては、注目の1年生コンビの登場です！』

司会進行役が朝矢たちの出番を告げた途端、講堂がわっと沸いた。

和臣の目の輝きが増して行く。

「結構、君らを見たいって人も多んだよ。頑張って」

戻ってきた漫才二人組からすれ違い様に声をかけられて、朝矢たちはライトに照らされたステージへと駆け出した。

第7章（3）

『いやーすごい、すごい盛り上がりです！スタンディングオベーション、拍手が鳴り止みません！』

朝矢たちのパフォーマンスは大成功。息もびったり合ったし、和臣は宣言通りにしっかり朝矢を受け止めてくれて、いつのどんな練習よりも上手く行った。

「トモ、これマジでいけるんじゃないか?!」

和臣もかなり手応えがあったようだ。興奮気味に朝矢の肩を揺さぶる。

最後の組まで終えて、出場者全員がステージに集められた。

『さあ、客席の皆様が投じてくださった票の集計が終わりました。いよいよ順位の発表です!』

朝矢の肩を抱く和臣の手に、ぐっと力がこもった。

「頑張ったよな、俺たち」

「うん」

「超バッチリ決まったし、一番盛り上がったもんな」

「うん」

お疲れ会兼夕飯の、ラーメン屋。並んだラーメンの間には「目録」と書かれた熨斗袋。

『後夜祭パフォーマンス 第2位』の。

「なんで2位なんだよおー」

和臣にしては珍しく情けない声を出して、カウンターに突っ伏した。

優勝を手に行けるといえるという実感があっただけに、その落胆ぶりは大層なものだ。

実際に優勝したのは、朝矢たちの前に出ていた2年生の漫才コンビ。早くもどこかのお笑い大会に出場オファーがあったとかなかったとか。

「まあ、仕方ないよ。ホントに面白かったもん」

舞台袖で出番を待っていた時、最後の方しかきちんと見ていなかったけれど、それでも緊張を忘れて笑えるほどによく出来たネタだったのだ。

「俺は...俺は賞品もらえないのか...?」

突っ伏した腕の隙間から目だけ上げて、これまた情けない様子で問うて来る和臣。

「もらったじゃん。目録だけど」

しかも後日もらえるのは校章の入ったノートやら鉛筆やらの文房具セットだそう。優勝が金券5,000円分なら、2位は3,000円分くらいもらってもいいんじゃないだろうか。優勝することしか考えていなくて、2位以下の賞品なんて全く気にしていなかった。

「そうじゃなくて...願掛けしてた方」

和臣はむくりと起き上がってじっと朝矢の目を見つめて来る。意味が分かって、朝矢は思わずたじろいだ。

朝矢の体のためにと、初めての時から今日までずっと、2度目のセックスに踏み切らずにきたのだ。それを和臣は優勝のための願掛けと銘打って禁欲を続けてきたのだから、優勝を逃した今どうなるのか。

「...いいんじゃないかな」

視線を外し、延びかけたラーメンを箸でつまんで。

「頑張ったんだし、ご褒美もらっても」

それ以上何も聞かれないように、一気に啜った。

何ヶ月もかけて練習してきた後夜祭のパフォーマンスは終わった。

でも、何年もかけて築いてきた朝矢たちの関係は、まだまだこれからなのだ。

第8章（1）

文化祭の翌日は全校生徒で片付けをして、さらに翌日は休みだ。

女子たちから力仕事をあれこれ頼まれた朝矢は、帰宅すると疲れた体をベッドに投げ出した。眠ってしまいそうなのを堪えて首を上げると、まだ捲っていないカレンダーが目に残る。

「あっという間に11月か...」

去年の今頃は、和臣と同じ高校に入りたくて受験勉強をしていたんだっけ。

朝矢に志望校を教えたのは、朝矢が同じ高校を目指してくれればと思ったからだ、和臣は言っていた。

あの頃から朝矢のことを好きだったと。

（俺はもっと前から好きだったんだぞ...）

想いを伝えるなんて絶対にしてはいけないと思っていた。

叶わなくても、親友として側にいらればいいと。

「トモのこと、独占したくてたまらないんだ...」

まさかこんなに和臣に愛してもらえるなんて。

（幸せすぎて寿命縮むんじゃないかな、俺）

愛されて死ぬならそれでもいい。

そんなことを考えてしまう自分は、よほど和臣中毒なのだろうか。

ブレザーのポケットから携帯を取り出し、履歴の最初に表示される番号をプッシュする。

「...うん、俺。うん...あのさ。明日、早く行くね」

もっと一緒にいたいんだ。

1秒でも長く、永く。

「さて、言ったからには早寝しないとな」

電話を切って、明日着ていく服を選ぼうとクローゼットを開ける。

少しでも和臣が脱がしやすい方がいいだろうかと一瞬考えて、頬が熱くなった。

翌朝、和臣のアパートの最寄り駅の改札を抜けると、自転車に跨がった和臣が待っていた。

「寒いんだからいいのに」

嬉しくて破顔しそうになったのを憎まれ口でごまかすと、バレているのかくすくすと笑われた。

「いいんだ、俺が早く会いたかったから」

そう言われるともうごまかし切れなくなって、顔が見えないように和臣の後ろに跨がって、ぎゅっと抱きついた。

朝の空気はだいぶひんやりしていて、風を浴びながら自転車を飛ばしてアパートに着く頃には手や耳が冷たくなっていた。

「和臣、鼻が冷たい」

「トモもだよ」

キスひとつでも季節を感じるもんだな、なんて言いながら部屋に上がると、和臣がコーヒーを淹れて出してくれた。

「ん、熱い」

「気をつけろよ、お湯沸かしたてで淹れたから」

ふうふうと吹いてから口に含んで、ゆっくり飲み込んで。体の中からじんわりと暖まって、ほうっと息を吐いた。

その様子を和臣がにこにこしながら見ているのに気づき、目を上げて何？と聞いてみると、

「いや、かわいいなと思って」

「子供っぽいって言いたいんだろー」

コーヒーにしたって、和臣はブラックで飲んでいるのに朝矢は砂糖とミルク入り。猫舌で、ちゃんと冷まさないと飲めないし。

「そんなことないよ」

相変わらず笑いながら、むくれて尖らせた朝矢の唇をちゅっと吸って。

頬や額にも何度も口づけられるから、飲みかけのコーヒーをテーブルに置いて首筋に抱きついた。和臣の腕は朝矢の背中に回って、途端、口づけが深くなる。

「ん...は、もう、まだ飲み終わってないのに...」

唇が離れた隙に文句を言うと、コーヒー飲むよりこの方が暖まるだろ、なんて。

確かにくっついていての方があったかいけど。

「それに、もらっていいんだろ？頑張ったご褒美」

「う...それはそうだけど...今から？」

初めての時に続いて今回も、こんな朝からすることになるのだろうか。

一応「そのつもり」では来たものの、外のあまりの明るさに目眩すら覚える。

和臣を見上げると、まさにこれからご褒美の包みを開けんばかりにわくわくした様子で無邪気な笑みを浮かべていた。

「どっちが子供なんだか...」

これからしようとしているのはおよそ子供らしさとはかけ離れているというのに。

でも、朝矢はつくづく和臣の笑顔には弱い。

何より、和臣の頼みを断る術なんて朝矢にはないんだ。

「...カーテン」

朝矢の言葉を肯定と受け取った和臣の笑顔に、少し大人びた色が差した気がした。

第8章（2）

「は...んっ...」

ちゅく、と唾液の絡む音が恥ずかしくて舌を引いても、逃げられる場所が限られた口の中ではすぐにまた捕まってしまう。

このキスにはどうしてもまだ慣れない。口から魂まで吸い取られてしまうような感覚に陥るから。

「ふぁ.....」

離れて行く和臣の顔を見ていたら、濡れた唇がキスの深さを物語っているようでやっぱり恥ずかしくなった。

「あー、ダメだ...」

和臣はそう言うと、ばさばさと服を脱ぎ始める。カーディガンごとシャツを頭から抜いて床に放り投げ、ジーンズも脱ぎ捨てる。ボクサーパンツの窮屈そうな膨らみの正体は聞くまでもなかった。

「あ...」

キスだけでこんなに興奮してくれたのかと何とも言えない気持ちになって頬を赤らめていたら、

「あんま見んなよ。トモが悪いんだからな」

罰が悪そうに頭を掻いて、今度は朝矢の服を脱がしにかかる。

「あっ俺、自分で...」

朝矢が着てきたのは、長袖Tシャツに半袖シャツの重ね着。結局脱がしにくい組み合わせになってしまった。

起き上がってシャツを脱ぎ、Tシャツの裾を持ち上げる。目の前で見られていて恥ずかしいけれど、一気に腕を上げた。

「あ...っ！」

胸元が露になったと同時に和臣が乳首にむしゃぶり付いてきて、不意打ちを食らった朝矢は甲高い声を上げてしまった。

「あ、あ、待って、あっ.....」

舌先で何度も舐られてゾクゾクする。Tシャツが腕に絡まってうまく抵抗できないまま、どさりと後ろに倒れ込んだ。

「トモ、乳首弱いよね...すっげーかわいい」

「な、何言って、あんっ...！」

両方を指先できゅっと摘まれ、また声が上がってしまう。そのままくりくりと擦るようにされ、びくびくと腰が跳ね上がった。

こんな所、男が触られて悦ぶようなトコロじゃない。そう思うのに。

「あ...はぁ...はぁ...」

ひとしきり弄られて解放された時には、息も絶え絶えにぐったりしてしまった。

ようやく、両腕を拘束していたTシャツが外される。そして、下半身を隠していたものも、全て取り払われた。

「あっ、ずるいっ...」

和臣はまだボクサーパンツを穿いたままなのに。朝矢だけ丸裸にされて、ひどくいたたまれない気持ちになった。

毛布を手繰り寄せて体を隠し、じっとりと和臣を見上げる。

それが和臣の加虐心を煽ってしまったのかもしれない。

「じゃあ、トモが脱がせて？」

にっこりと、瞳も唇も綺麗な弧を描かせて、和臣は朝矢に強請ったのだ。

隠した場所が見えないように気をつけながらも一度起き上がって、そろそろとボクサーパンツに手をかける。ぐっとゴムを引っ張って下ろすと、欲望の象徴が顔を出した。一瞬怯んだけれど、手を止めずに何とか全て脱がせる。

「あ、あの...」

顔を見られなくて俯くと曝け出されたものが目に入って、思わず反らしてしまう。でも、朝矢を思ってこうなっているの

だと思えば、嫌悪感はなかった。

思い切って、手で触れてみる。少し扱くように擦ると、それはびくりと震えた。

「トモ、いいよ、そこまでしなくて」

髪を撫でて遠慮の意思を示す和臣に、首を横に振る。

「俺、何にもできないけど、その、ご褒美...」

和臣が少しでも喜んでくれるなら。

返事を待たずに手を動かし始めると、上から息を呑む音が聞こえた。

頭を和臣の胸元に預けて、片腕で抱きつくようにしながら反対の手で和臣を愛撫する。雄の匂いが強くなるにつれ、和臣の吐息が熱と湿り気を帯びてくる。

「は...トモ...」

先端から溢れる先走りが指を伝って、ぬめりを塗り付けるように絡ませるとそれが大きく反応した。

「オミ、気持ちいい...?」

「ん、そこ、いいかも...」

裏筋を強めに擦ると、和臣が掠れた声で快感を伝えて来る。

髪にキスされて、お礼を言われているようで嬉しくなった。

もっともっと気持ちよくなってもらいたい。

どうしたらいい?

少し考えて、朝矢は髪を撫でる和臣の手から抜け出るとそこに顔を寄せた。

粘液に濡れた先端を、舌先でぺろりと舐めてみる。同時にとぷっと溢れたのを、反射的にちゅっと吸い取った。

舌の上でぬるぬると遊ばせて、こくりと飲み込んでみる。

独特な味がするけど、危険なものじゃない。本能が大丈夫だと告げるのを信じて、今度は竿の部分に舌を這わせる。

根元から先端に向かって舐め上げて、雁首のくびれを引っ掛けて。自分が触って気持ちいい所を何度も舐めていると、

「猫みたい...」

上擦った声が降ってきた。

第8章（3）

和臣が感じていることに気を良くしたまま、唇で先端を挟み込む。奥まで滑らせて口の中に収めると、和臣が喉を震わせるのがわかった。

「ん...んっ、ん.....」

じゅぷ、じゅぷ、と音を立てながら顔を上下させ、溢れるものを吸い取って飲み下す。繰り返すうち、和臣のものは口の中で大きく育って行く。

「は...あ、気持ち.....」

その声にちらと視線を上げると、和臣は恍惚とした表情で朝矢の口淫を見下ろしていた。たまらない高揚感がゾクゾクと体を駆け上がって行く。

さらに激しく顔を動かしていると。

「んふっ...？」

毛布の隙間から和臣の手が入り込んで、朝矢のものを握り込む。

「あ、やっ...ああ...」

見えないところで与えられる快樂に、一気に意識を持って行かれてしまう。和臣のものから口が離れたが、必死に舌を伸ばして絡めた。

「あ、あ、んむっ...う...！」

顎を掴まれ、猛ったものを突き入れられる。喉の奥まで入ってきて、生理的な涙がじわりと滲んだ。

「ん、んんっ、んう、ん...っ」

「っは...トモ...」

和臣の腰が前後に揺れる。ずるりと抜け出てはまた押し込まれるモノに口内を犯され、自分のものは和臣の手に犯され、倒錯的な快感に支配されて行った。

流されそうになりながらも口内を出入りするものを懸命にしゃぶって、射精を促す。

「は...イキそ...」

「んっ...！」

ずるっと、勢いよくそれが引き抜かれる。追い縋ろうとした途端、和臣の手が朝矢のものを激しく擦り上げた。

「あっ、あっあダメ、出、っイク！あ.....っ！」

興奮していた朝矢の体は一気に追い上げられ、あっという間に白濁を吐き出した。

「...っ、」

「あ、あ...」

一呼吸置いて、生暖かいものが朝矢の頬から顎に降り掛かった。

指先で掬うと白い粘液が絡み付いて、それが和臣の精液だと悟る。

「ん.....」

ちゅぷっと指先を舐ると、あまりに青臭い性的な味に全身がぶるりと震えた。

「ごめん...トモ」

「いいよ、気にしてないし...」

「ほんとごめん...」

「いいってば」

濡れタオルで朝矢の顔を拭きながらひたすら詫げる和臣に、謝られすぎて困る朝矢。

互いに熱を放出した後、和臣はくったりとベッドに俯せる朝矢を見て、急に慌てだしたのだ。まだぼうっとしている朝矢を抱き起こして、どろっと垂れた白濁をティッシュで拭き取り、さらに濡れタオルで拭き取り。

「トモにあんなことさせた上に顔に出すなんて、俺って最低だな...」

すっかりしょげてしまった和臣を見ていると、朝矢も少し悲しくなってくる。

ご褒美のつもりで、和臣に喜んでほしくてしたことなのに。

和臣が気持ちよくなってくれて嬉しかったのに。

「ばっかっ...」

和臣の胸をどすんと叩く。

「いいって言ってんだろ、分かれよばっかっ！」

「うぐっ...」

力任せにどんどん叩くと、和臣が痛そうに眉を寄せて前のめりになってくる。

「分かった、分かったから」

ぎゅうっと抱き込まれて、身動きが取れなくなってしまった。

体を振って抜け出そうとしてもどうにもならなくて、脱力して凭れ掛かるとようやく腕の力も緩む。

しばらく無言のまま、呼吸を合わせるように静かに寄り添った。

「ご褒美、まだ全部もらってないよな...」

頬を撫でられて顔を上げると、和臣の額が朝矢のそれにこつんとぶつかってくる。

「もらっていい？残りも、」

言葉の途中で唇を重ねられて、朝矢は返事の代わりに和臣の背中を抱きしめた。

「あ...っ、あ...あ...あ...」

繋がった場所から、溶けてしまいそうなほどの熱。

一度経験したからか、初めての時よりも受け入れるのは随分楽だった。

和臣が朝矢の体を揺さぶる度に甘い声が出て、恥ずかしいのを隠す為に必死で言葉を紡ぐ。

「あ...あん、オミ、気持ちいい...っ？」

ちゃんと、ご褒美になってる？

「ん、すごい気持ちいい...最高...」

答える和臣の腰がぐっと進んで奥を突かれる。抽送が激しくなって、朝矢は体が離れないように和臣にしがみついて脚を絡めた。

「あっ、あ、好き、オミ、大好きっ...」

うわ言のように繰り返すと、和臣の腕が背中に回った。

汗で滑る体も、朝矢の中で息づくものも、吐息すら、全てが愛おしい。

「トモ、俺も...トモが好きだ、絶対離さない...」

「あ...あっ、アッあっ、はあっ.....」

強く抱き合って、二人は白い世界へ昇り詰めて行った。

エピローグ

「ん...」

髪を撫でる手が心地いい。

手は移動しながら頬や首筋を撫でて、その手に擦り寄るように顔を動かしていると。

「ほんっと、猫そっくり」

和臣の楽しそうな声が振ってきた。

外見がそれらしいと言われることは小さい頃からよくあったけど、しぐさまでそうなんだろうか？

でも朝矢は、猫みたいに気まぐれじゃない。

そう思っていたけど、猫も毛色によって性格が違うんだとか聞いた。

よく懐いて甘えん坊な猫もいるんだよ、って。

（別に誰にでも甘える訳じゃないけど）

胸元に額を預けてみれば、優しく抱きしめてくれた。

こんなに甘やかしてくれるのは、和臣だけだ。朝矢が甘えたいのも和臣だけ。

「あー、あったかい。幸せ...」

こんなに朝矢を愛してくれるのも。

今も、この先も、きっと。

伸び上がって顔を近づけて、呼んでみる。

「オミ」

「うん？」

「明日さ、どこ行こうか」

「そうだなー...起きてから考えようか...」

あやすように朝矢を撫で続けながら、和臣の声が少し眠そうになってくる。

暗がりを目をこらしてみると、瞼も閉じかけているようだ。

「ね、何時に起きる」

「んー...」

もう、返ってくるのは生返事になっていた。朝矢を撫でていた手もいつの間にか止まっていて。

しょうがないな、と苦笑して、薄く開いた和臣の唇を軽く食んだ。

「おやすみ、オミ」

おやすみのキスは朝矢から。

だからおはようのキスはオミからして。

一日の始まりと終わりに、君の顔を見ていたいから。

和臣の腕の中に潜り込んで目を閉じる。

こうしてぴったりくっついていると、片時も離れたくないと思ってしまう。

こんな気持ちを知ったのは、君に出会えて、君を好きになれたから。

ありがとう、オミ。

俺を好きになってくれて、ありがとう。

Fin.

トモとオミ～2年越しの片思い

<http://p.booklog.jp/book/46345>

著者：反町しん

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sorimachimttb/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46345>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46345>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.